

I 学校図書館の機能活用を促す授業の構想

1 学校図書館の機能

次の文章がある。

8 教材・教具の活用と学校図書館の利用

- (8) 視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図るとともに、学校図書館を計画的に利用しその機能の活用努めること。

児童の自主的・主体的な学習を推進することや指導方法を工夫し基礎的・基本的な内容を児童が確実に身に付けるようにするためには、教材・教具の適切な活用や学校図書館の機能の活用が重要である。

〈 略 〉

また、学校図書館については、教育課程の展開を支えるものとしていわゆる資料センターの機能を発揮し、また、児童が自ら学ぶ場としていわゆる学習センターの機能を発揮することが求められている。したがって、学校図書館は、学校の教育活動全般を資料面から支えるものとして図書、視聴覚教材、その他学校教育に必要な資料を収集し、整理し、保存し、これを児童や教師の利用に供することによって、児童の自主的、主体的な学習や読書活動を推進するとともに、学校の教育課程の展開に寄与することができるようにすることが要請される。

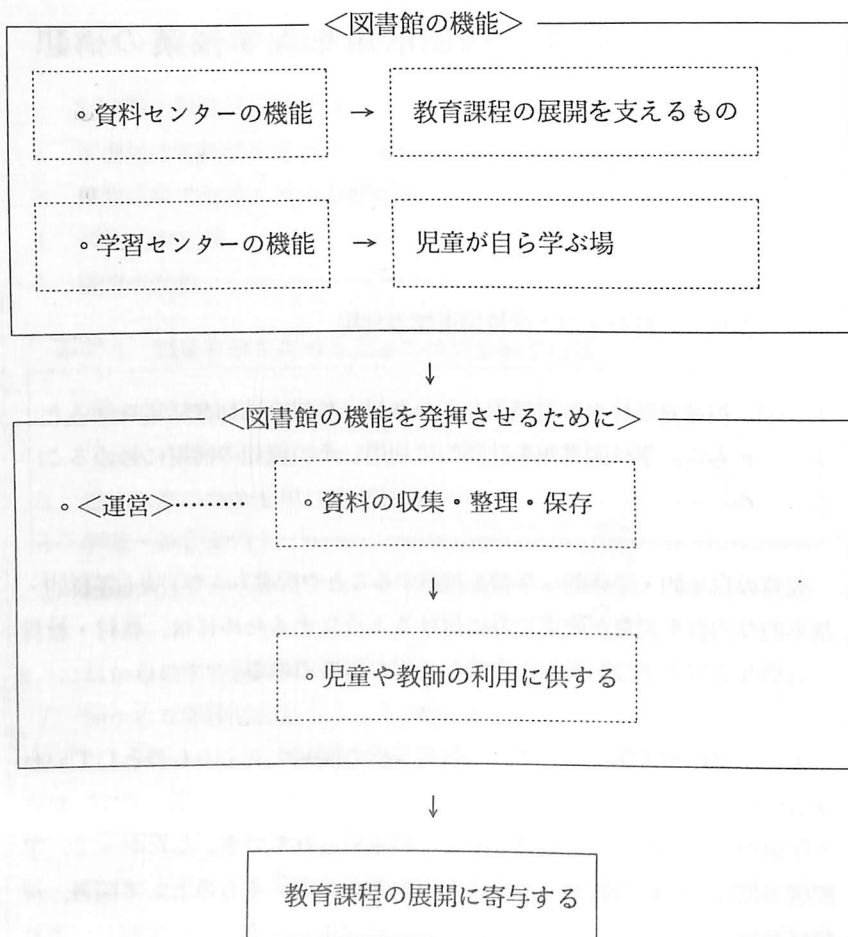
『小学校指導書 教育課程一般編』平成元年6月 文部省 70～71ページ

図にするとよりはっきりと分かる。

・児童の自主的・主体的な学習を推進
・基礎的・基本的な内容を身に付けさせる

→

学校図書館の機能の
活用が重要



図にすると一目瞭然である。学校図書館は、児童や教師が学校図書館の機能を活用することによって「教育課程の展開に寄与する」役割を果たすよう求められているのである。

学校図書館は、児童のみが活用するのではない。教師も活用するのである。教師も活用できるためには、「教師の利用に供する」ように運営されていなければならない。教師が学校図書館を利用しているとは思えない。にもかかわらず次のような言を聞くことがある。

子供はさっぱり図書館を活用していない。

教師には、学校図書館は児童が活用するための施設という意識がある。この意識が変わらないかぎり児童は学校図書館を活用するようにはならない。

次の言も聞く。

子供は図書館を大いに活用している。

調査統計によれば、確かに児童は学校図書館を活用している。しかし、である。「活用している」＝「図書の貸し出す数」とみている。「貸し出しカード」ならまだしも、「読書カード」という名称まである。児童の読書量＝「活用している」なのである。

このような意識からは、学校図書館に求められている機能を発揮させることで教育課程の展開に寄与するなどという発想は出てこない。また、学校図書館の活用を指導法の改善という視点で検討するなどという発想も生まれない。これでは、教師は学校図書館を活用するようにはならないし、ましてや、児童をやである。

先に引用した『教育課程一般編』の本文一行目には何が書かれていたか。

児童の自主的・主体的な学習推進することや指導方法を工夫し基礎的・基本的な内容を児童が確実に身に付けるようにするためには、……学校図書館の機能の活用が重要である。

児童が学校図書館の機能「資料センターとしての機能・学習センターとしての機能」を活用できるということは、児童が自主的・主体的に学習できるということにはほかならないのである。

学校図書館の機能を自主的・主体的に活用できる児童を育てる指導法の工夫とりわけ授業改善が求められている。

ところで、図書館の機能であるといわれている「資料センターとしての機能」と「学習センターとしての機能」は、どこが異なるのだろうか。両者の機能の

区別はどうしてもよいのではないかと考えられる教師がいないわけではない。

「児童はどのようにしたら学校図書館の機能を使うようになるか」と題した研究発表を聞く機会があった。発表の内容は、児童が学校図書館を利用しやすいように学校図書館の環境を整えたり、廊下のスペースに学年コーナーを設置して読書意欲を喚起するというものであった。そして、こと細かに環境構成を説明したものであった。つまり、児童の読書意欲をどのようにして高めるかというのが発表の趣旨であった。研究発表者が、学校図書館の機能をどのように考えたのか不明であった。

研究発表者は、読書をするために学校図書館を利用させることが学校図書館の機能を活用させることだと考えられたようなのである。図書館の機能活用ができる児童を育てたいのは、すでにみたように自主的・主体的に学習できるようにしたいからである。児童が自主的・主体的に学習することによって、基礎的・基本的な内容を実身に身に付けさせたいからなのである。だからこそ、教師の指導法の工夫、とりわけ授業改善なくしては不可能なことなのである。指導法の改善（授業改善）をしないで、学校図書館の機能を活用する児童を育てることはできない。

では、学校図書館の機能である「資料センターとしての機能」と「学習センターとしての機能」はどこが異なるのだろうか。

学校図書館にある図書は、図書資料と呼ばれている。図書資料という名称からも分かるように、学校図書館は本来的には図書資料センターなのである。ために、いくつかの大学図書館に電話して「貴図書館の図書は学習材ですか、それとも資料ですか。」と尋ねたところ、例外なく「図書資料」ですという答えだった。これはどういうことかということ、「資料性」を強調すると、できるだけ多くの種類の図書資料を収集することになる。同じ図書資料は収集しないことになる。種類を多くすることがもっとも大切になる。

これに対して、学習材として図書資料をみる場合には、種類よりも同じ図書資料を何冊も収集するということになる。図示すると次のようになる。

- 資料としての図書………できるだけ種類を多くする。
- 学習材としての図書………同じものを多くする。

これが基本である。

どうということはない。このようなことはどこの学校図書館でもやっているではないかと思われたかもしれない。事実、どこの学校でもやっている。

しかし、である。

「資料としての図書」「学習材としての図書」が文学に比して異常に少ないのである。学習材として使用したくても、使用できないくらいに少ないのである。これは、予算の問題も確かにある。予算の問題を差し引いてもなおかつ文学が異常に多く、学習材としての図書が少ないのである。学習材であるからには、グループに一冊は最低限度確保したいものである。学校図書館は文学図書が異常に肥大化したために、学校図書館＝読書室になってしまったような風情がある。

ただし、現在の状況からすると「資料センターとしての学校図書館」「学習センターとしての学校図書館」を両立させることは予算面で困難な点がある。なぜなら、一方は種類を多くすることを要求しているのに対して、もう一方は同じものを多くすることを要求しているからである。

現在のところ、両者を両立させるよりかは、教育課程の展開に寄与するという観点からした場合、どちらかの機能を充実させることが実際的な対応ではないだろうか。

2 「利用指導」と機能活用指導との違い

次の文章がある。

(オ) 学校図書館の利用や情報の適切な活用

この内容については、各教科などの学習と関連した問題をとらえたり、また、視聴覚的な手法の活用、実際に図書館で実践活動を行なうなど、指導に具体性と変化をもたせることが望ましい。また、日常の読書指導との関連を考慮するとともに、学習において情報を適切に選択し、日常の学習に活用する方法や態度の育成に努めることが大切である。

『小学校指導書 特別活動編』平成元年6月 文部省 18ページ

上記の解説は、学習指導要領の学級活動の内容である「学校図書館の利用や情報の適切な活用」を受けたものである。

学校図書館の「利用指導」は特別活動の「学級活動」で行うようになってい
る。上記の文章を読めば分かるように「利用指導」には、次のねらいがある。

- 。 学習において情報を適切に選択し、日常の学習に活用する方法や
態度の育成

このねらいを達成するために、各学年で何を指導するかを配列したものが学
校図書館利用指導の年間指導計画である。次ページのような主題配当表に基づ
いて、さらに各学年での指導事項を決めているのが大方の指導計画である。内
容は大同小異である。

この指導計画によれば、学級活動の時間を使って「利用指導」する単位時間
は次のようになる。

学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年
時間数	3.5	3.5	4.5	5.0	5.0	4.0

では、実際にこれだけの単位時間を実際の指導時間として確保できるだろう
か。ほとんど不可能に近い。特別活動の時間枠で「利用指導」として使用でき
る単位時間は1時間である。2時間確保することさえ相当の覚悟と決意が必要
である。時数計算をしてみれば分かる。

そうすると、次のことが課題になる。

わずか1単位時間の「利用指導」で、先に示したねらいが達成されるかであ
る。わずか1単位時間で指導できることは、領域Aである。領域Aの中でもA
～1、A～2を具体化した指導事項がせいぜいのできることである。では、そ
の他の領域に関わる事項を指導しなくてよいのかということそんなことはない。
指導すべきである。ねらいを達成するためには指導すべきなのである。

では、どこでどのようにして指導すべきなのだろうか。

どこで指導するのかと言えば、「各教科などの学習と関連」させて指導する

3. 学級指導における学校図書館の利用と指導の指導計画表（主題一覧表）

年 学		1	2	3	4	5	6
領 域	学 年	1	2	3	4	5	6
	学 年	1	2	3	4	5	6
A 図書館及びその資料の利用に関する事項	A-1 図書館資料の種類や構成を知って利用する。	○本をないせつに ○おもしい本をさがす	○本のとりあつかい	◎分類と配列	○図書館の利用	○簡単な整理	
	A-2 学校図書館の機能と役割を知って利用する。	◎としょかんめぐり	◎本のかりかみまし方 ◎かんたんな分類 ◎学級分館の利用	◎本のしくみと取りかき ◎図書館のまわり			◎図書館と図書委員 ◎学校図書館のはたらき
	A-3 公共図書館の機能と役割を知って利用する。			○公共図書館の利用			
	A-4 地域の文化施設の機能と役割を知って利用する。				○地域の文化施設の利用		
B 情報・資料の収集・整理・活用に関する事項	B-1 図鑑の利用に慣れる。		◎図鑑の使い方			◎図鑑の利用	
	B-2 国語辞典、漢和辞典などの利用に慣れる。				○国語辞典の使い方	○漢和辞典の使い方	
	B-3 百科事典、専門事典などの利用に慣れる。				◎事典の使い方		
	B-4 年鑑などの利用に慣れる。					◎年鑑の利用	
	B-5 図書資料の検索と利用に慣れる。					○いろいろな検索のしかた	
	B-6 図書以外の検索と利用に慣れる。						
	B-7 目録、資料リストなどの利用に慣れる。						
C 情報・資料の収集・整理・活用に関する事項	C-1 必要な情報・資料を調べる。				◎必要な資料		
	C-2 記録のとり方を工夫する。			○読書ノートのとおり方		○記録のとり方	○研究の記録
	C-3 資料リストを作る。						
	C-4 目的に応じた資料のまとめ方を工夫する。						◎資料のまとめ方
	C-5 目的に応じた伝達の仕方を工夫する。						
D 生活の充実に関する事項	C-6 資料の保管の仕方を工夫する。						
	D-1 望ましい読書習慣を身につける。	◎なのしいどくしょ ◎本のよみかた		◎いろいろな読み物を読む	◎読書のはんいを広げよう	◎自分の読書傾向	○わたしの読書計画
	D-2 集団で読書などの活動を楽しむ。				○読書クイズ		
	D-3 進んで読書などの活動に参加する。						
	D-4 進んで読書などの活動を中心とした学校行事に参加する。						○読書週間
備 考	1 単 位 時 間	2	2	3	3	3	2
	2 単 位 時 間	3	3	3	4	4	4

『学校図書館の利用と指導のハンドブック』佐田京市教育センター 4～5ページ

ことになる。その場合、前ページのような「利用指導」に基づいた指導事項に従った指導でよいかということである。

学校図書館の機能には、「資料センターとしての機能」と「学習センターとしての機能」があった。これらの機能は、いわば「情報センターとしての機能」である。「利用指導」の内容を情報処理能力の育成という観点から組み替えることが必要である。そうでなければ、児童の主体的・自主的な学習を期待することができないからである。

「利用指導」の内容を「情報処理能力の指導内容体系表」（横浜市金沢区八景小学校でまとめたもの）としてまとめたのが、次ページの表である。

児童が、学校図書館の機能を活用し、自主的、主体的に学習できるようにするには、「利用指導」の指導事項を情報処理能力の育成という観点で見なおす必要がある。

横浜市金沢区八景小学校の取り組みはいくつかの点で評価できる先駆的な取り組みである。

- ・「収集・選択活用・伝達・保存」という情報処理過程をふまえて指導事項を具体化している。
- ・指導事項をいわゆる「取り立て指導」としてではなく、問題解決過程に働く「学習技能」というかたちで具体化している。
- ・情報センターとしての機能を児童が活用できるようにするという観点をふまえている。
- ・各教科の指導法の工夫を促す手がかりを与える指導事項になっている。

このような計画であって初めて、「児童の自主的・主体的な学習活動を推進するとともに、学校の教育課程の展開に寄与する」ことができるといえよう。児童が自主的・主体的に学校図書館の機能を活用できるということは、児童に生涯学習をしていく上での素地を培っていることにもなる。生涯学習の素地は情報を収集し、選択し、活用することによって、得た内容を伝達することができるとともに、それらの情報を資料として保存し、整理することだからでもある。

「利用指導」は、学校図書館の機能活用という観点で見なおす必要がある。

情報処理能力の指導内容体系表

過程	指導事項	具 体 的 内 容							
		低 学 年		中 学 年		高 学 年			
		1 年 生	2 年 生	3 年 生	4 年 生	5 年 生	6 年 生		
収 集	1 図書、特に百科事典、図鑑、年鑑、参考書の特性を知る。	◇いろいろな図鑑が学習に使える。 ・もののなまえ、どんなものかもっとくわしく知りたい時に使うと便利である。		◇図鑑の特性を理解し利用に慣れる。 ・課題を解決する時、どの図鑑が合っているか調べながら使うことができる。 ◇国語辞典の使い方がわかる。 ・国語辞典は五十音順に並べてあり、ページの上方に見出し語がついている。 ・国語辞典は、言葉の意味だけでなく、その言葉に関連したいろいろなことがわかる。		◇漢和辞典を使うことができる。 ・漢和辞典は漢字の読み方や意味を調べる時に使い、漢字についてあらゆる事がわかる。 ・漢和辞典の引き方は、読み方がわかっているときは、五十音順で、わからない時は〈部首索引〉か〈総画索引〉で探す。 ◇百科辞典や専門辞典の使い方がわかる。 ・百科辞典は毎日の生活の中のことからを説明してある本である。 ・専門辞典は、ある分野のことだけを説明してある本のことである。		◇漢和辞典が使いこなせる。 ・正しい引き方で、能率よく引いて調べる。 ◇二種以上の百科辞典からさがせる。 ・いろいろな百科辞典を正しい引き方で能率よく利用し、学習目的により適した情報をつくる。 ◇年鑑の特性を知り、利用のしかたがわかる。(白書類も) ・毎年一回発行されるので年度や単位に気をつけて利用する。	
	2 地域図書館や地域の文化財まで広げる。					◇地域の公共図書館を進んで利用する。 ・自分の住んでいる地域の公共図書館の働きを理解する。		◇地域の文化財を進んで利用する。 ・プラネタリウム	
選 択	3 必要な部分が早く探せる。 (索引・目次・項目)			◇目次・索引・項目の役割がわかる。 ・五十音に書いてある事典は分冊されている。 ・調べたいことがらが、はっきりしていない時は目次で、はっきりしている時は索引を使って調べる。		・項目別に書いてある事典は、同じような項目のことがらが近くにある。 ・索引はだいたい本の最後に書いてあるが、本によって書き方がちがうので、その本の索引の書きあらし方、前書きなどを読んで利用する。			
	4 テーマに合った選択ができる。					◇簡単な資料リスト(書目)作りができる。 ・内容は次のものを入れる。 分類記号 利用した資料名 小見出し ページ 出版社名 ◇資料リストを使うことができる。 ・テーマとの関係調べる。			
扱 理	5 わかりやすいように工夫して整理する。	◇同じ仲間の資料に分け、まとめることができる。 ・ねらいを理解して、資料を大まかにわけることができる。 ・自分で判断してまとめることができる。							
	6 複数の資料から選ぶ。					◇雑誌などから必要なことを切りぬく。		◇新聞の見出し小見出しを見て判断する。	

	(最新のものか) (目的に合っているか)		<ul style="list-style-type: none"> ・調べたい資料を雑誌などから見つけ、マーキングしておくことができる。 ・いくつかの新聞や雑誌などから、同じ課題の資料を切りぬくことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見出しや小見出し等を見て資料を手早くとり出すことができる。 ・見出しや小見出しの役目がわかる。 <p>◇目的に合ったものを選ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最新のものかどうか。 ・必要に応じた年度のものがある。 <p>◇複数の資料から選ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ひとつの課題に対して、複数の資料を比較して必要なものをみつけることができる。
	7 図書以外の情報資料にまで広げる。	◇いろいろな情報資料を選ぶことができる。	◇いろいろな情報資料を選ぶことができる。	◇図書以外の情報・資料を学習に役立てる。
選	8 情報・資料等の要点をまとめる。 (箇条書き、要約、小見出し)	<ul style="list-style-type: none"> ・家の人、近所の人、人の話 	<ul style="list-style-type: none"> ・時刻表 ・地図類 ・グラフ ・パンフレット ・写真 ・絵葉書等 	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞、雑誌、テレビ、図書等 ・当時の新聞、当時の学校の時間割スライド
採		◇それぞれの情報・資料のまとめ方を知る。	◇それぞれの情報・資料のまとめ方を知る。	◇いろいろな情報・資料からぬきがいし、まとめる。(自分の考えを入れて)
活	9 ノートのとり方を工夫する。	◇ノートや記録カードの記入のし方がわかる。	◇記録カードのとり方を工夫する。	◇要点のとり方を工夫する。
用		<ul style="list-style-type: none"> ・学習したことを正しく書いていく ・ノート(カード)に日付(月、日)題名、ページ等を入れたり、行間、余白をゆったりとしたりして、わかりやすく、見やすく書くことができる。 ◇簡単な絵図を作ったり、使ったりする。 ・調べてわかったこと、気づいたことを、簡単な絵図に表すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・観察の視点を決め、時間の経過にそって記録することができる。 ・必要に応じて色分けしたり、いろいろな記号を使ったりして、見やすく工夫できる。 <p>◇目的に応じた記録のとり方の工夫をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目あてに従い資料や情報を要約したりまとめたりすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・出典、自分の考えを記入する。 ・全文を写しとる。 ・一部を抜粋する。 ・要点を書きとる。 ・など、その場に応じたノートのとり方ができる。
	10 論旨のまとめ方を工夫する。(理由づけのしかた)	◇簡単な表をつくる。	◇まとめ方の手順を知る。	◇使いやすさや考えたまとめ方ができる。

活用					<ul style="list-style-type: none"> ・研究のテーマ ・研究の動機 ・研究計画と方法 ・研究内容 ・まとめと反省 ・参考資料
伝達	11伝達を生かす、情報や資料を利用する。 (提案、発表、討議、報告) (器具の効果的な使用 OHP等)	<ul style="list-style-type: none"> ◇視聴覚機器やコピーを利用する。 ・大きく写し出す、くりかえし聞けるという特性に気づき、操作できる。 		<ul style="list-style-type: none"> ◇発表内容に応じた伝達をする。 ・報告は事実即して ・効果的な機器の使用等 	<ul style="list-style-type: none"> ◇発表内容に応じて伝達方法の工夫をする。 ・事実、感想、意見を区別する。 ◇発表を効果的にするための視聴覚機器の利用に慣れる。 ・いろいろな視聴覚機器の特性を知り、学習に生かすことができる。
	12対象や場所に合った伝達を考える。 (学年に、グループで)	<ul style="list-style-type: none"> ◇伝える時の態度や方法について考える。 ・動作化したり、道具などを使って発表できる。 ・つくりや働きについての文を書き、絵を見て発表できる。 ・小さい頃のことを絵や文に書き発表できる。 ・絵を見て工夫したところが発表できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◇伝える時の方法の工夫をする。 ・表やグラフを用いて発表できる。 ・OHP等を用いて発表できる。 ・結論から先に示して理由づけする伝え方ができる。 ・具体物を使ってわかりやすく発表できる。 		<ul style="list-style-type: none"> ◇発表形態の工夫をする。 ・場所、対象、人数に応じた方法を工夫する。(所要時間、提示物、TV等)
	13発表方法の評価ができる。	<ul style="list-style-type: none"> ◇発表の態度や方法について相互評価をする。 ・聞き手に伝わりやすい発表であったかをお互いに確かめ合う。 			<ul style="list-style-type: none"> ◇発表の態度や方法について自己評価する。 ・発表内容、資料や態度が効果的であったか自己評価できる。
保存	14ファイルの、整理・保存の工夫をする。			<ul style="list-style-type: none"> ◇記録を生活や次の学習に役立てる整理のしかたを工夫する。 ・学習に使用したノートをとじたり、資料をファイルしてとりだしやすく整理する。 	

3 学校図書館の機能を発揮させる図書館運営

学校図書館の機能を発揮させるためには、「魅力ある図書館づくり」が求められている。「魅力ある図書館づくり」の取り組みとしては学校図書館の環境構成がある。環境構成は図書館主任及び図書館司書の精力的な取り組みによって改善・充実されてきている。

しかし、学校図書館の機能を発揮させるためには、情報センターとしての観点からの取り組みが必要である。

学校図書館の配架は十進分類法を採用しているところがほとんどである。十進分類法は確かに優れた分類法であり、それなりの伝統と実績がある。十進分類法は大方の図書館でも採用されている。しかし、配架が十進分類法でされているかといふとかならずしもそうではない。

例えば、全国教育研究所連盟では独自の分類と配架をしている。学校図書館の蔵書数は、公立図書館と比べると少ない。これは図書館の性格が違うからである。学校図書館は、繰り返し述べているように「教育課程の展開に寄与する」目的で設置されているのである。ということは、十進分類法で分類したとしても、配架は「教育課程の展開に寄与する」という観点ですることができるといふことであり、また、そうすることが求められている。

少しずつではあるが、次のようなコーナーを設置して、配架を工夫している学校図書館がふえてきている。

学習に役立つコーナー

蔵書数が少なければ、このようなコーナーの設置からはじめればよいだろう。蔵書数が多ければ、さらに細分化をしたいものである。

例えば、次のようにである。

◦ 低学年の学習に役立つコーナー

※低・中・高学年別コーナー

↓

◦ 各学年ごとのコーナー

↓

- 各学年・各教科ごとのコーナー
- ※平行して、問題別コーナー

いずれにしても、情報センターとしての機能を充実させるためには、異常に高い文学の領域の蔵書比率を現在よりも下げ、児童の学習に役立つ蔵書を増やすことが必要である。

学校図書館は児童の利用に供することに主眼がおかれて運営されているが、「教育課程の展開に寄与する」ためには、教師の利用に供するようにも運営されなければならない。

次の文がある。

(学校図書館の運営)

第四条 学校は、……学校図書館を児童又は生徒及び教員の利用に供するものとする。

- 一 図書館資料を収集し、児童又は生徒及び教員の利用に供するものとする。

『学校図書館法』

児童の自主的・主体的学習を推進するために、指導法の工夫が求められている。学校図書館の機能を活用できる児童を育てるためには、教師が学校図書館を利用できていなければならない。しかし、現実には、大方の教師は学校図書館を活用していない。活用しない理由はいろいろあるにちがいない。活用していない現状を改善するために、学校図書館の運営を工夫し、児童以上に教師に対する働きかけが必要である。

購入希望図書を教師から聴取する場合であっても、最新の新刊情報を知らせた上とするなどの配慮もある。また、学習に役立つ蔵書を教育課程の展開に即して知らせるなどのレファレンスサービスをきめ細かにするなどの配慮もあるだろう。これらの働きかけは、すでにいくつかの学校で行われているがまだ十分とはいえない。

なにか、不十分か。

学校図書館は教育課程の展開に寄与するためのものである。だとしたら、教育課程、とりわけ指導計画に蔵書を記載するところまで具体化されなければならないはずのものである。各教科の指導計画に学校図書館の関連図書を記載するのである。ここまでしなければ、教師は動かない。

教師に対すると同じく、レファレンスサービスは児童に対しても行うべきである。児童に対してはレファレンスサービスをしているという学校が多いことが予想される。確かに、教師に対するそれと比較した場合、児童に対するレファレンスサービスは行われている。しかし、その内容は何かといえ、読書案内がほとんどすべてなのである。学習に役立つ情報が不足しているのである。児童に対しても学習情報を提供すべきである。

しかしである。いくら情報を提供しても、かならずしも児童が学校図書館の機能を活用するようになるわけではない。

なぜか。

情報活用ができるためには、活用するための知識と技術が必要なのである。ところが、授業ではこうした知識や技術を指導していない。本双書は、学校図書館の機能を活用する、つまり情報を活用する児童を育てるためには、どのような授業をすべきなのかを説明するものである。

文部省でも、学校図書館の機能活用を図るには何をしたらよいかをテーマに学校図書館講習会を開催したり、全国に研究指定校を指定したりしている。学校図書館の新しい在り方が模索されているのである。

4 学校図書館の機能活用を促す授業の構想

学校図書館の機能を活用している児童とは、情報を活用している児童のことである。

情報を自由自在に活用している児童がいる。

筑波大学付属小学校の有田和正氏の学級の児童がそれである。氏の学級の子どもが、社会科の時間で活用する図書は10種類以上になる。児童の机上にはうずたかく各種の図書が積まれている。児童は授業の展開に応じて、それらを自在に活用している。それらを活用しながら、自らの考えを作り出しているのである。

このように各種の図書を自在に活用できる児童は何ができる児童なのだろうか。児童は、どのようにして各種の図書をはじめとした情報を収集しているのだろうか。情報を収集する手法は、どのようにして身に付けたのだろうか。有田学級に図書館の機能活用を促す子どもを育てる授業の秘密があるように思えてならない。

学校図書館を活用した次の授業がある。

児童一人一人に短冊を10枚くらい渡す。右の短冊である。

児童一人一人に図書を10冊選ばせる。

児童に選んだ図書の最初の一文を視写させる。

一文を書き出したら、グループを作る。

グループで書き出した一文を仲間わけする。

児童は仲間わけすることによっていくつものことに気付く。

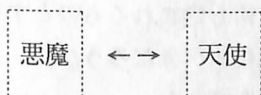
例えば、日本のものと、外国のものとは書出し文に違いがあることに気付く。また、ジャンルによって書出し文に特色があることに気付く。

これらは、図書に対する関心を喚起するだけでなく、児童に何を見たと何が分かるのかという初歩的な分析技術をも培っているのである。

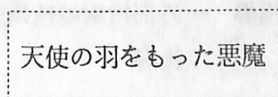
次に、書名を仲間わけさせる。

そうすると、書名の付け方にもある特徴があることに気が付く。

例えば、概念の異なるものをセットにした書名である。



悪魔と天使とでは明らかに対立する概念である。この両者を組み合わせた書名にするとどうなるか。



なかなかの書名である。

書名・作者名・出版社名

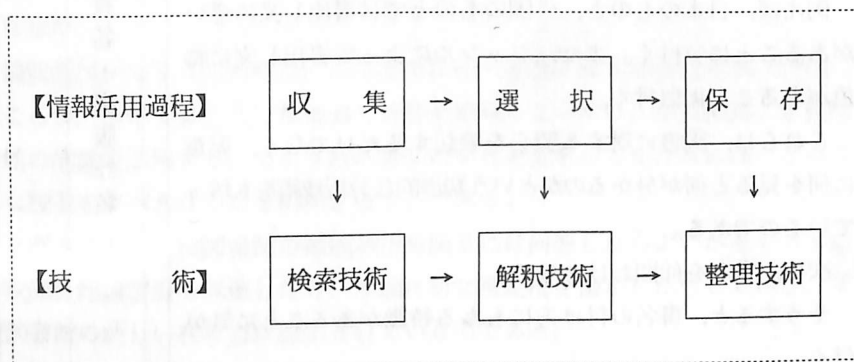
これは何を指導したことになるのだろうか。

児童はこのような指導を受けることで、書名の読み方を知る。また、作文の題名の付け方をも知るのである。児童の中には、作文の題名を考えるために、図書の題名を活用する児童も現れるようになる。児童は図書を読むだけのものとしてではなく、もっと広く多様に情報として活用することができるようになる。

本双書は、こうしたことを考え、次ページに示した研究の構想に基づく授業実践事例報告書である。

本書は、学校図書館の機能を活用する児童を育てるには機能を活用するための技術を児童に身に付けさせるべきだという考えに立っている。では、どのような技術を身に付けさせるべきなのだろうか。

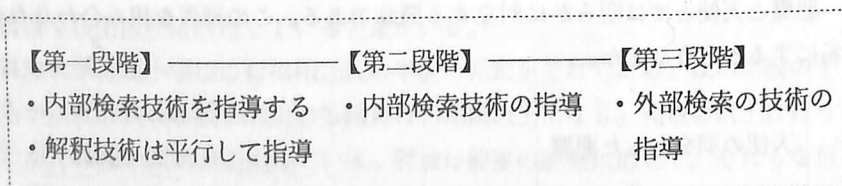
粗く整理すると次のようになる。



上記の技術の中で、授業として指導しなければならない技術は、検索技術と解釈技術である。解釈技術には、情報を加工する技術も含まれるものとする。

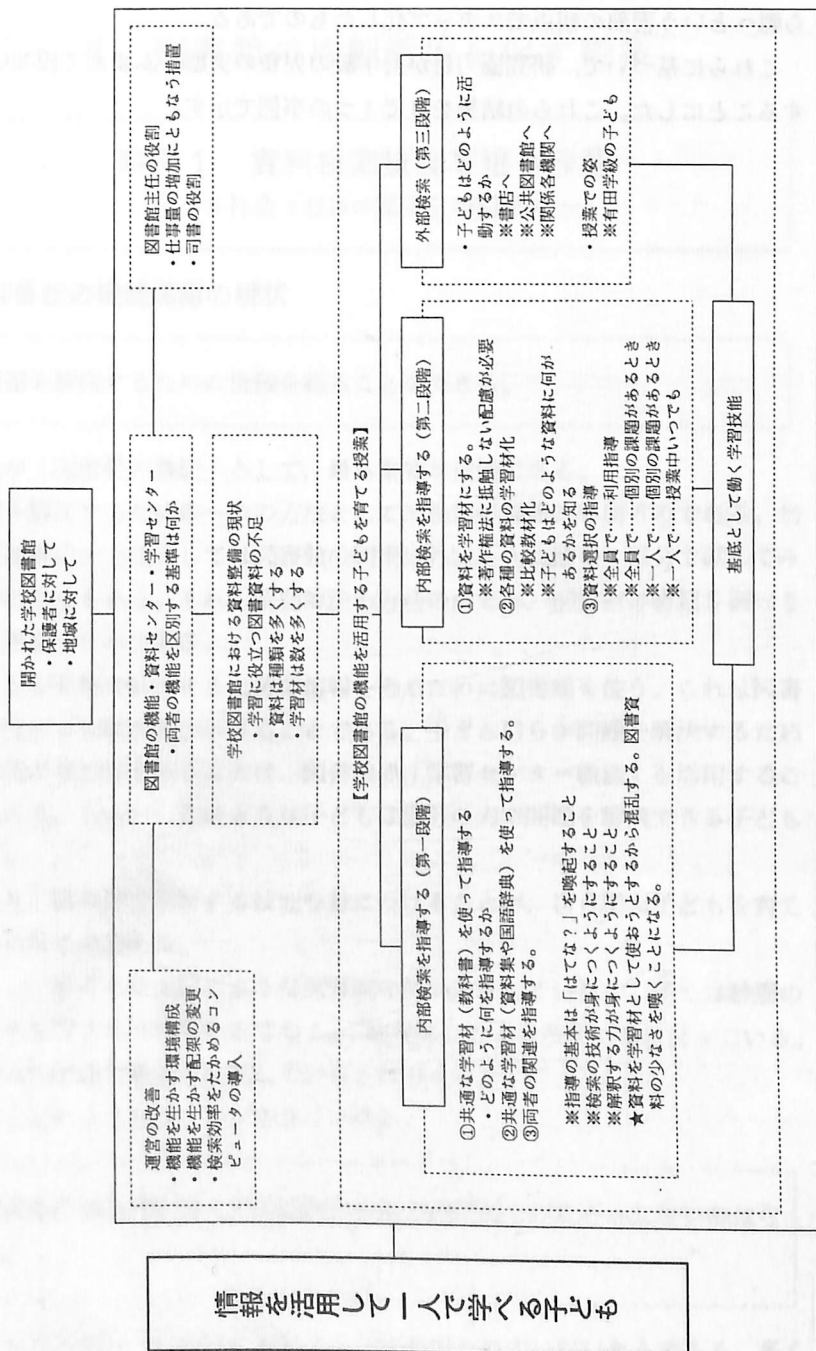
では、これらの技術をどのようなステップで授業化すべきだろうか。

授業を構想するにあたって、次のようなステップを考えた。



上記のステップは、どのような学習材を使って指導するかという観点と易か

【図書館の機能を使いこなす子どもを育てる授業の実践研究構想の枠組み】



ら難へという習熟の観点でステップ化したものである。

これらに基づいて、研究協力員が自学級の児童の実態をふまえて授業研究をすることにした。これらの結果をⅡで4つの事例で示す。

Ⅱ 図書館の機能活用を促す授業

事例 1 資料検索技能を培う授業

— 小6 社会「日本の歴史」の授業で —

1 図書館の機能活用の現状

問題を解決するための情報を得ることができる。

これが「図書館の機能」として、最も重要な機能である。

問題を解決するための一つの方法として図書館の書籍群を使うのである。当然、問題解決の方法としては図書館の利用以外にも人に聞く・自分で試してみるなどの方法もある。それら問題解決の方法の中でも、図書館の書籍を調べる方法を重視するのである。

子どもが問題を解決するための情報を得るために図書館を使う。これは図書館で学習する技能を身につけることである。子ども自らが問題を解決するために図書館の書籍群を使うことは、図書館の「学習センター機能」を活用することでもある。さらに、このような子どもは自分の力で問題を解決できる子どもである。

つまり、図書館で学習する技能を身につけることが、自ら学ぶ子どもを育てることになるのである。

しかし、子どもは上記のような図書館の使い方をしていない。多くは読書のための本を探すだけの使い方である。「読書室」のような使い方になっている。これでは図書館の機能を活用しているとは言えない。

なぜ上記のような使い方ができないのか。

図書館の書籍群を使って問題解決のための情報を得ようとししないのはなぜか。

子どもに図書館の書籍群に対処する技能が培われていないからである。多く

の書籍の中に自分の求める情報があることに気付いていないからである。どの本のどの部分を調べればいいかわからないからである。

2 図書館の機能活用のための技能

では、どのような技能が培われればよいのか。

図書館の書籍群を使って学習するためには、大きく分けて2つの技能が必要である。

- A 資料解釈技能……例えばグラフの解釈や文章の解釈である。「要するにこれは～ということを言っているんだ」という考え方が必要である。
- B 資料検索技能……必要とする情報がどこにあるかが分かり、見つけることができる技能である。

この2つの技能は別々のものではない。資料の内容がわかるから、どこにあるかわかる。また、資料を見つけるためには、目の前にしている資料がどういう資料なのかという解釈をする必要がある。ただ、どちらかと言えば資料解釈技能が伸びることで検索ができるようになる傾向がある。とはいえ、資料検索技能を伸ばしていくことは、当然資料解釈技能を伸ばすことにもつながる。この2つの技能は表裏一体の関係にあると言える。

2つの技能が表裏一体の関係であるにもかかわらず、あえて2つの技能に分けた。これは、図書館の書籍群を使って学習するためには「資料検索能力」が重要になるからである。

3 資料検索技能を分析する

資料検索には2つの方向がある。

＜資料検索の方向＞

- a 目的情報の検索……ある一つの文献の中から目的とする情報を検索する。例えば、教科書の中から「伊藤博文」についての情報を探す場合である。辞書を引くことも目的情報の検索である。

- b 文献の検索……目的とする情報を多くの文献（書籍）から探し出す。

例えば、「良寛」を調べようとする時に『人名事典』
を持ってくる場合である。

どの文献（書籍）を読めば求める情報が出ているかが
分かり、情報が引き出せることである。

また、資料の検索をする場合、キーワードがあるかどうかで違ってくる。

—＜キーワードの存在＞—

- ① キーワード有……調べるべき言葉が分かっている場合。比較的簡単に
調べられる。例えば、「大名行列」という調べるべ
き言葉が分かっている場合である。
- ② キーワード無……調べるべき言葉が分かっていない場合。この場合は、
どの言葉を調べればいいのかというキーワードを考
えることから始めなければならない。例えば、1枚
の絵を見て調べる場合である。

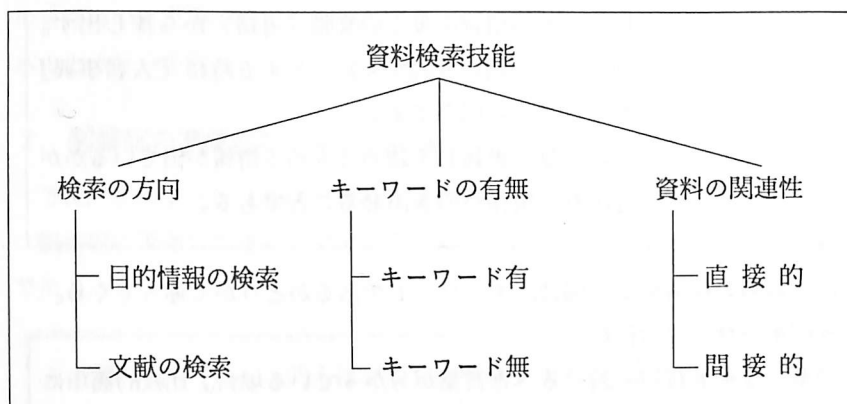
さらに、検索した資料と問題との関連性が直接的な場合と間接的な場合があ
る。

—＜資料の関連性＞—

- ア 直接的……問題とぴったり一致する形での資料。例えば、「聖武天皇
が大仏を作った理由」という問題に対して、同じ項目で資
料が出ている場合。
- イ 間接的……問題と対応する形では出ていないが、解釈することで問題
解決に役立つ資料。問題に対して資料がなぜ該当するのか
説明しなければならないだけに高度な思考が要求される。

このように分析すると、資料検索技能は次のページの構造を持つ。

いずれも、下に位置する方が高度の技能である。



4 資料検索技能を培う道筋

これまで述べた分析から資料検索技能は5つの段階に分けることができる。

段階	検索の方向	キーワード有無	資料の関連性
I	目的情報の検索	キーワード有	直接的
II	目的情報の検索	キーワード有	間接的
III	文献の検索	キーワード有	直接的／間接的
IV	文献の検索	キーワード無	直接的
V	文献の検索	キーワード無	間接的

「キーワード無」というのは高次の技能になる。それは、問題を解釈して自分でキーワードを設定しなければならないからである。また、「文献の検索」ができるようになれば、それ以後は自分に合った様々な文献を使うようになるはずである。問題に応じて、教科書・資料集・学習参考書・辞書・事典類などを使って調べられるようになるのである。

この5つの段階をもとに、「授業レベルにおける資料検索能力を培う道筋」を構想する。

1	キーワードを提示して、全員に同じ文献で調べさせる。調べる文献は1種類でよい。まず教科書を調べさせ、次に資料集を調べさせ、次いで辞書を調べさせる……というように、調べた結果を全員が確認できるようにする。
2	キーワードを提示して、手持ちの複数の文献から自由に調べさせる。ここでの文献は、まだ教科書・資料集・辞書など全員が同じく持っている文献である。子どもは手持ちのどの文献から調べてもよい。調べた内容を発表させるとき、教科書・資料集については同じ場所を全員に確認させる。したがって、発表の形は「教科書〇ページ△行目に～」となる。
3	キーワードを提示して、2つ以上の文献から調べさせる。そして、調べた内容を比較させる。教科書では〇〇で、資料集では△△だ、というように。
4	ここまでくると、子どもは自分で探して文献を教室に持ち込むようになる。小学校6年生用の参考書とか学習事典などを家から持ってくる。このような資料からも積極的に調べさせる。（「文献の検索」の始まりである。）
5	時々、学習の場を図書館に移す。そして、図書館内の本を授業中にいつでも探しに行ってもよいことにする。最初のうちは事典類が中心であるが、次第に「歴史」の棚にある本にも移っていく。
6	キーワードを直接教師から提示しない授業を始める。例えば、「一寸法師は誰か？」「(日清戦争の絵を見せて) この絵は何を表したものか？」のように“比喩”を考えさせる学習を組む。いろいろな言葉（キーワー

	ド) から調べていくように促す。
7	キーワードを提示しない授業をする。調べた内容について、自分なりの解釈をつけ加えて発言（発表または記述）できるようにする。自分の経験と結びつけられるようになれば最もよい。

資料検索技能を培う道筋とともに、6年社会の歴史単元の指導計画を以下のように構想する。

月	小单元名	授業の方法	培う学習技能	留意点
4	大昔の人々のくらし 大王の墓	1 枚の絵を見て疑問に思ったことを調べる。	1 ハテナを見つける。 2 ハテナを教科書や資料集で調べてみる。	一つ一つのハテナを順番にみんなで調べる。
5	邪馬台国はどこか？ 聖徳太子と飛鳥の朝廷 奈良の大仏 平安京と藤原氏	魏志倭人伝を現代語に易しく直した文をもとに邪馬台国のあった場所を推定する。 キーワードを示して、そのキーワードについて調べさせる。 キーワードは人名または文化財である。	3 資料の中の項目（この場合は「地名」）を関連づける。 4 地図の見方。 5 キーワードについて手持ちの資料から調べる。 6 自分で調べる言葉を見つけて調べる。 ☆このころから自分で参考書や資料を教室	 一つのキーワードから次々と調べる言葉が現れるようにする。 子どもには「情報をた

6	源頼朝と鎌倉幕府		に持ち込むようになる。持ち込む資料は小6用社会科参考書や中学の教科書が中心である。	くさん集めるんだ」と促す。
	室町幕府と農村の動き			
7	天下の統一		7 様々な文献から情報を調べる。	
	徳川家康と江戸幕府			
9	朝鮮の人々に嫌われている歴史上の人物 2人は誰か？	あるテーマを与え、そのテーマについて調べる。テーマは部門史のようなものである。	8 複数の情報を複数の文献から調べる。 9 いくつかの情報を総合して考える。	2 学期からは通史学習をしない。どこを調べればいいのか予断を与えないためである。
	江戸時代3大改革の共通点と違いは？			
	キリスト教の日本史			
10	大名行列の謎		10 百科事典の使い方	このころから図書館での授業も始める。
	今の習い事のルーツ（始まり）はいつか			
	明治維新で活躍した人物の		11 歴史上の人物を関連させてみる。	

	関係図を作る			
	文明開化とは何か？			
11	<p>「一寸法師」のモデルは誰か？</p> <p>「岩室甚句」は誰の歌か？</p>	<p>キーワードを直接示さない授業をする。</p> <p>それぞれの内容は何を表しているのか、という解釈をさせる。</p>	<p>12物語や絵に隠された意味を考える。</p> <p>13調べた事を総合して物語や絵に隠された意味と適合するか、考える。</p>	<p>直接的に書いてある文献はないことを強調する。</p>
12	この絵は何を表しているのか？	<p>「日清戦争」「日露戦争」「自由民権運動」「戦時中の駅弁の包装紙の絵」を示して、「これは何の絵だろうか」と問う。</p>	<p>14絵の情報を解釈して調べた情報を裏付けとする。</p> <p>15分かっていることでも「ハテナ」として出す。</p> <p>16調べたことに対して自分の解釈をつけ加える。</p> <p>17自分でハテナを出しそのハテナについて自分で調べる。</p>	<p>教師からキーワードを示すことはしない。</p> <p>子どもは図書館の本を自由に調べても良い。</p>
	大日本帝国憲法と日本国憲法の同じ所と違う所			政治単元へのつなぎ

5 授業「明治からの世の中と新しい日本」

- (1) 単元名 この絵は何を表しているか

～明治からの世の中と新しい日本～

- (2) 単元と学習技能の育成

- a 単元で育てたい学習技能

本単元は、大単元「日本の歴史」の中の小単元である。

これまでに子どもには以下のような学習技能が育ってきている。

- ①未知の言葉（既知の言葉でも）を辞書で意味を確かめる。
- ②キーワードに対して、教科書や資料集から調べ出することができる。
- ③学習参考書や事典類を利用して調べ出することができる。

また、全員ではないが、次のような子どもの姿も見られるようになってきている。

- ④図書館の事典類から必要な情報を引き出すこと。
- ⑤図書館の歴史関係の書籍から必要な情報を引き出すこと。

例えば、「大名行列とは何か」に対して「大名行列」「参勤交代」「誰が始めたのか」「大名行列の影響」などを、子どもたちそれぞれが持っている資料群から調べていた。この授業でR男は次のように発言した。

大名行列の影響を『ハイトップ』で調べたんだけど、5つの影響があったみたい。①大名の反抗を不可能にした。②大名の経済力を弱くした。③交通を発達させた。④江戸文化を地方に広めた。⑤江戸を都市化した……ということです。

この5つの影響について調べる活動がこの後続く。この中で「江戸文化とは何か」が問題となった。「江戸文化」をキーワードにして、子どもたちは様々な資料を探し始めた。図書館にある『平凡社百科事典』を探す子もいた。

そして、このように、手持ちの資料や図書館の資料を探そうとする姿が見られるようになってきている。

このような学習に対応するため、子どもたちはそれぞれいろいろな資料を教室に持ち込むようになってきていた。多くは書店で購入した学習参考書や中学校の教科書である。また、社会の授業の前に図書館から関係する本（多くは事典類）を持ち込むようになった。

しかし、上記の実態からわかるように、キーワードに対して調べた内容を発表することが多く、調べた内容について自分の考えを加えることがない。

このようなことから、本小単元では2つの学習技能を育てることを目指す。

A 調べた内容に自分の考えをつけ加える。

現在問題になっている事柄について「資料には〇〇と書いてある。だから△△と考える」というように、調べたことと解釈を結び付ける学習技能である。

B 図書館にある書籍の中から問題に対応する資料を探す。

多くは事典類の活用となるだろうが、できるだけ多用な書籍から探し出せるとよい。

b 本時で育てたい学習技能

本時の授業は、「4 資料検索技能を培う道筋」で述べた第6段階にあたるものである。すなわち、次のような学習技能を子どもに培おうとする。

キーワードを直接教師から提示しない授業を始める。例えば、「一寸法師は誰か?」「(日清戦争の絵を見せて)この絵は何を表したものか?」のように「比喩」を考えさせる学習を組む。いろいろな言葉(キーワード)から調べていくように促す。

これまでの児童は、ある語句を与えられることで、その語句を調べ始めていた。つまり、調べるための手がかりとなる言葉＝キーワードが与えられていたのである。

しかし、本時では調べるための手がかりとなる言葉＝キーワードがはっき

りと与えられない。本時は一枚の絵を提示して、「これは何の絵か」を追求させる授業である。絵は何らかの事態を示しているのだが、直接示しているわけではない。そのため、絵の中の情報に対して解釈を加えることが必要になる。例えば、本時で扱う絵が「日露戦争」だと考えても、なぜこの絵が日露戦争を表したもののなのかを解釈する必要がある。

そのため、子どもにとってみれば、キーワードを自分で見つけたす必要があるのである。そういう点で、これまでの学習技能よりも一歩進んだ学習技能が必要とされるのである。

このように、調べるべき言葉＝キーワードが直接的に与えられない学習状況で、調べる技能を育てる授業としたい。言い替えれば、子どもが自分で調べる言葉を見つけ出させる技能を育てる授業としたい。

つまり、本時で育てたい学習技能は2つである。

A キーワードが提示されない状況で調べる技能。

B 絵の情報と自分の調べた内容を結びつけて解釈する技能。

(3) 本時の実際

次ページの絵を黒板に掲示した。(黒板に掲示したのは大洋紙に拡大してある。) また、子どもたちにはB 5大の同じ絵を配布した。

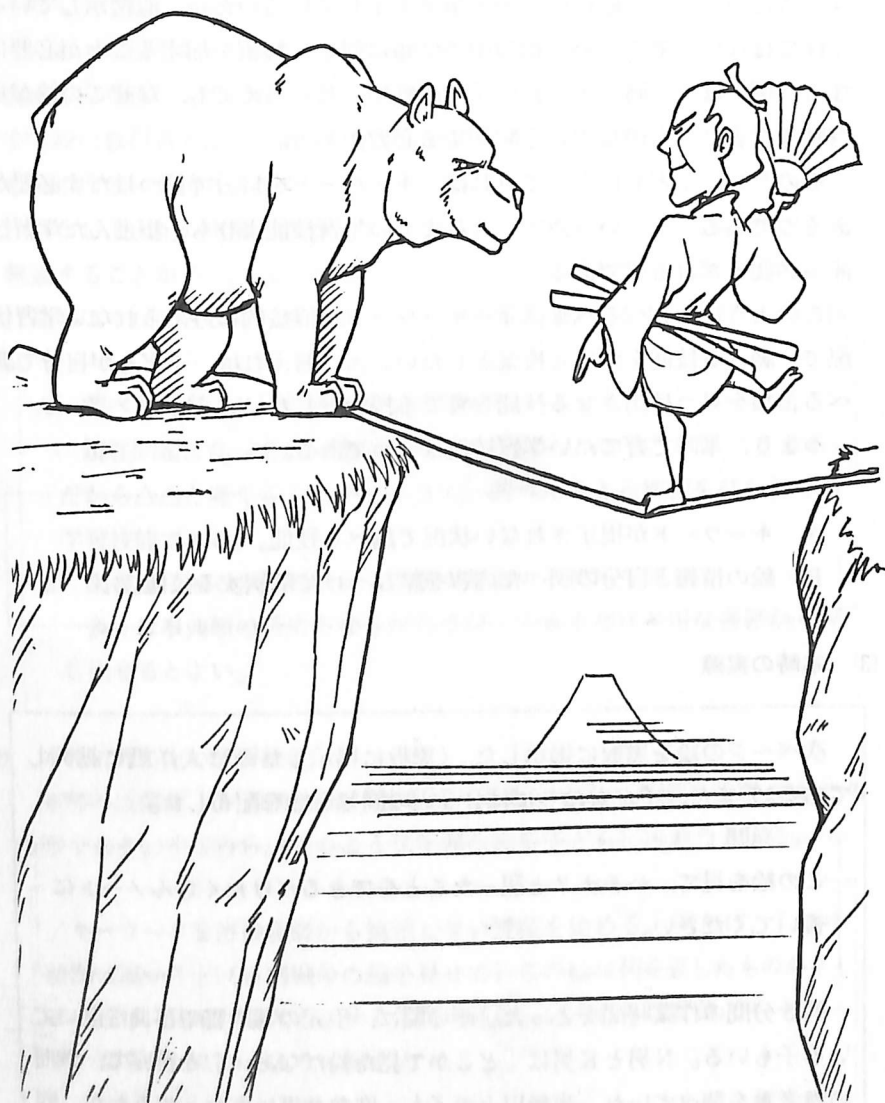
発問1

この絵を見て、ハテナ? と思ったことをできるだけたくさんノートに書いてください。

約5分間の作業時間をとった。その間に、手元の参考書や事典を開いている子もいる。N男とK男は「どこかで見た絵だなあ…」と言って、数冊の参考書を調べていた。半数以上の子も一度参考書にあたってみたが、同じ絵が載っていないためすぐに閉じた。

T男はノートに次のハテナ? を書いた。

・人間は何に乗って立っているのか?



出典『有田式調べる力を鍛えるワーク』有田和正著・飯島英明イラスト
明治図書，151ページ

- 何を持っているのか？
- どうして笑っているのか？
- うしろの山は何か？
- いつの時代か？
- どこの国か？
- なぜ、がけにしていたのか？

ハテナ？だけを発表させた。以下のようなハテナ？が出された。

- この絵の作者はだれか？
- この絵はいつの時代だろうか？
- この絵は何の絵か？ 意味はあるのか？
- 季節はいつか？
- 熊にいらまれた人間が平気なのはどうか？
- つなに片足の状態でだいじょうぶなのか？
- この人間は何をしているのか？
- 扇子は何のためにあるのか？
- この人間の名前は？
- 人間の方が負けそうだけれどだいじょうぶなのか？
- 熊は何を表しているのか？
- 熊と人間は助け合っているのか？（熊がつなを踏んでいて助けているようだから）
- 山は何という山か？
- がけとがけの間は海のようにだけれど、どこの海か？

ハテナ？が一通り出たところで、数冊の参考書を調べていたK男が発言した。

「この絵は『日露戦争』を描いた絵だということです。」

K男とN男は数冊の参考書のなかの『くわしい社会』（文英堂）から同のような絵を発見したという。

発問2

「日露戦争」？「戦争」？ 戦争の絵なの？ この絵のどこが戦争なの？ 単なる「綱渡り」の絵だよ。

子どもたちはどう答えればいいか、分からなくなったようであった。一分ほど沈黙があった後、最初に出したハテナ？について調べたり考えたりしたことを発言し出してきた。

「山のことなんだけど、形から見て富士山じゃないかと思う。」

「それにがけとがけの間は海だろうし、海で富士山が見えるということは日本の近くだと思う。」

「日本の近くと言っても、海で富士山が見えるってことは日本じゃないと思うんだけど……」

「私は、いつの時代かっの調べてみたんだけど、絵の中の人がチョンマゲということは文明開化よりも前で江戸時代だと思う。」

「チョンマゲの人物というのは、時代を表しているんじゃないくて、日本人ということを表していると思う。」

「私もチョンマゲの人物は日本人ということを表していると思う。だってこの前『日清戦争』の絵の時も明治時代なのに日本人はチョンマゲだった。ということは、チョンマゲにしておけばすぐ日本人だとわかるんだと思う。」

『誰が日本人とわかるの？』と教師。

「世界の人が。」

『ということは、世界の人がこの絵を見ていたわけだ。』

「チョンマゲだったら世界の人誰が見ても日本人だとわかるから、だからチョンマゲで書いたんだと思う。」

「同じなんだけど、人間がチョンマゲなのは、チョンマゲさえ書いておけば世界中の誰が見ても日本人だとわかるからだと思う。だから、明治よりも後の時代でもチョンマゲ姿で書かれてしまうんだと思う。」

「さっきこの絵が『日露戦争』の絵だというのがあったから、辞書で『日露戦争』を調べてみたら、『1904年から1905年にかけて、中国に関する権利や利益をめぐる日本とロシアの間で行われた戦争。日本、ロシアとも戦争が続けられなくなって、アメリカのルーズベルト大統領の仲立ちでポーツマス条約が結ばれた』と書いてあった。」

「やっぱりこの絵は『日露戦争』をかいたものだと思う。世界の人が日本とロシアの関係を見た時の絵で、日本がロシアと戦争をしていて日本が

危なくなっている状態をかいいたんだと思う。綱渡りのような人間が下に落ちそうだから危ない状態だ。」

「チョンマゲの人が日本人で、片足で立っているのはやっぱり危ない状態を表しているんだと思う。教科書の107ページに『日本軍ははじめリュイシュンにあるロシア軍の陣地を13万人で攻撃し、6万人の死傷者を出して、ようやくここを占領しました』とある。13万人のうち6万人もの死傷者を出したということは、軍の半分を失っている。これが片足で立っている状態を表しているんだと思う。」

「今の意見の続きなんだけど、教科書107ページに『シェンヤンでも、日本軍25万人、ロシア軍32万人がぶつかるはげしい戦いが行われました』と書いてある。日本軍よりもロシア軍の方がはるかに人数が多い。人数が多くて強そうだから、日本が人間でロシアが熊なんだと思う。」

「この絵をかいいた人は日本が負けると考えていたんじゃないのか。だって人間と熊じゃあ、熊が勝つに決まっている。だから、日本が負けるはずだと思っていたんだろうと思う。」

「土地を考えてみると、チョンマゲの人間の方が狭くて、熊の方が広い。実際、地図帳を見てみると、ロシアは広いけれど日本は狭い。だから、がけの土地は日本とロシアの土地の広さを言っているんだと思う。」

「だから、狭い日本が広い土地を持つロシアに攻めていっている。」

「私も日本がロシアに攻めていっているんだと思う。そうすると、つなごうの下は日本海ということになる。」

「この絵は世界の人が見た絵で、ロシアから引き下がれ、と言っているんだ。」

「綱渡りの状態でいるのは、攻めていっている人がたくさん死んでいるからだと思う。」

「チョンマゲの人が差しているのは木刀だと思う。どんどん戦力が少なくなっているから、刀じゃなくなっている。」

『こけおどしで差しているわけね。』

発問3

今日の授業のまとめをノートに書いてください。

書き終わった子からノートを提出して授業を終了した。

以下、子どもの授業のまとめである。

A男

この絵は日露戦争だと思う。日本の陸軍はリャオトン半島から南満州（ロシア）に進んだ。だから熊がさきにつなについて、下は日本海、がけは国と国との国境だと思う。そして、人物よりもロシアの熊の方が大きい。日本の人は小さいから、この人物と熊の大きさは日本とロシアの人の量を表していると思う。

B男

この絵は日露戦争の様子絵だと思う。

がけには熊がいるが、これはロシアのことで、ロシアの方が大陸が大きい。日本は陸地が狭い。これが絵のがけの広さになっている。

でも、絵の熊はつなを押さえているみたいだ。これはロシアが日本を迎えうつようにしていることを表しているんだろう。日本の軍隊は半分くらい死傷者になったから、つなの上で片足を上げているんだろうと思う。

戦争の原因は、日英同盟後も日本とロシアの対立がおさまらず、1904年とうとう戦争になったということだ。

C子

世界一の大国と言われていたロシアと戦い、日本海海戦などで勝利をえた日本は、諸外国からもその力を認められるようになった。しかしぎせいも大きく出した。……と書いてあった。

それで、このつなわたりというのは、海の上で戦うというような意味でぎせいしゃがいっぱい出ていることを表していると思う。だから、この絵は日露戦争だと思う。

D子

この絵は日露戦争だ！ なぜなら熊にヒミツがある。熊は大きい。それに熊のいるがけの方の面積が大きい。だから日本よりも大きい所だと考え

る。熊が大きく、面積も広いということは、日本よりも何百倍も大きな所になる。ということは、ソビエトかアメリカかカナダかブラジルのような所になる。アメリカとは昭和に戦ったから、チョンマゲのころじゃない。ブラジルやカナダとは戦ったと聞いたことがないから違う。ソビエトとはロシア時代に戦った。だから、この絵は日露戦争なのだ。

6 授業の分析

(1) キーワードが提示されない状況で資料を検索することができたか。

絵を提示した直後、N男とK男の2人の子どもが手持ちの参考書や事典類から同じ絵を検索しようとし始めた。この2人は「どこかで見た絵だなあ……」とつぶやきながら探している。この2人にとっては、まず自分の記憶の中の検索を行い、その後資料の検索を行ったということになる。そのため、この2人は最初から明治時代を中心に資料を検索していた。

一方、その他の子どもも、手持ちの参考書や事典類を検索してみたが同じ絵がないことがわかり、あきらめたようだった。N男とK男との違いは「どこかで見た…」という記憶があるかどうかである。

では、N男とK男以外の子どもたちにとって何がキーワードとなるか。

「ハテナ？」である。自分で出した「ハテナ？」または他の子が出した「ハテナ？」をもとに調べることができればよい。例えば、「私は、いつの時代かっのを調べただけど、絵の中の人チョンマゲということは文明開化よりも前で江戸時代だと思う。」という発言をした子である。この子は、他の人の出した「ハテナ？」を調べている。

しかし、授業ではK男が「この絵は『日露戦争』を描いた絵だということですよ。」と発言している。この絵が「日露戦争」の絵とわかってしまった子どもたちはどうなるか。「ああ、これは日露戦争の絵なんだな」と考えが安定してしまい、これ以上絵の内容を解釈しようとしなくなる。そして、当然、他の資料も検索しなくなる。

他の資料を検索させ、絵の内容を解釈させるための働きかけが、発問2である。「この絵のどこが戦争の絵なのか」と問いかけているのである。

この発問により、子どもたちはこの絵と戦争（日露戦争）を結び付けなけれ

ばならなくなる。結び付けるためには、「資料」と「解釈」が必要である。

子どもたちは「日露戦争」をキーワードにして資料を検索し始めた。

発言した子どもが調べた資料は以下のとおりである。

①辞書

②教科書

③地図帳

④学習参考書（『くわしい社会』）

発言した子ども以外の子どもの多くは資料にあたっている。例えば以下のよ
うな資料である。

- ・ 中学校の歴史の教科書
- ・ ハイトップ小学6年（旺文社）
- ・ 日本史事典（旺文社）
- ・ 自由自在（受験研究社）
- ・ 歴史基本用語集
- ・ 小学ベスト教科事典（学研）
- ・ 社会科資料集

また、図書館から次の本を持ち込んで利用していた。

- ・ 学習カラー百科（学研）
- ・ 学習子ども百科（学研）
- ・ 学習百科事典（小学館）
- ・ 学研の図鑑＜日本の歴史＞

このように、多くの資料から「日露戦争」をキーワードとして検索していた
のである。そして、この検索が「学習のまとめ」に表れている。以下の部分で
ある。

A男

……日本の陸軍はリャオトン半島から南満州（ロシア）に進んだ。……

B男

……戦争の原因は、日英同盟後も日本とロシアの対立がおさまらず、1904
年とうとう戦争になったということだ。

C子

世界一の大国と言われていたロシアと戦い、日本海海戦などで勝利をえ
た日本は、諸外国からもその力を認められるようになった。しかしぎせい
も大きく出した。……と書いてあった。

E子

……あの熊はロシアだ。「ロシア対トルコ」の戦争の絵があって、そこには「トルコ（七面鳥）とロシア（熊）。熊は仲良しの七面鳥を食べたくなった」と書いてある。だから、熊はロシアだ。

これらの情報はいずれも授業の中では出されていない。自分で調べた結果、得た情報である。このように、「日露戦争」をキーワードとして様々な資料を検索している。また、得た情報も一人一人異なっている。

一枚の絵をもとに、自分でキーワードを設定して、資料を検索したのである。

(2) 絵の情報と自分の調べた情報を結び付けているか

絵の情報と自分の調べた情報を結び付けて解釈する技能。これが当学級の子どもたちにもっとも必要な技能である。

これまでの子どもたちは、ある問題について調べた情報をそのまま使うだけであった。「日露戦争」を調べたら、その調べた内容を使う（発言する・ノートに書く）だけだった。

本時では、発問2によって解釈を迫られている。つまり、この絵がなぜ「日露戦争」を表しているのか、説明しなければならなくなったのである。このため、調べた情報をもとに絵の情報を解釈している発言がでてくるようになった。

以下の発言である。

「チョンマゲの人が日本人で、片足で立っているのはやっぱり危ない状態を表しているんだと思う。教科書の107ページに『日本軍ははじめリュイシュンにあるロシア軍の陣地を13万人で攻撃し、6万人の死傷者を出して、ようやくここを占領しました』とある。13万人のうちの6万人もの死傷者を出したということは、軍の半分を失っている。これが片足で立っている状態を表しているんだと思う。」

「今の意見の続きなんだけど、教科書107ページに『シェンヤンでも、日本軍25万人、ロシア軍32万人がぶつかるはげしい戦いが行われました』と書いてある。日本軍よりもロシア軍の方がはるかに人数が多い。人数が多くて強そうだから、日本が人間でロシアが熊なんだと思う。」

…〔中略〕…

「土地を考えてみると、チョンマゲの人間の方が狭くて、熊の方が広い。実際、地図帳を見てみると、ロシアは広いけれど日本は狭い。だから、がけの土地は日本とロシアの土地の広さを言っているんだと思う。」

これらの発言はいずれも教科書や地図帳からの情報をもとに絵の情報（片足で立つチョンマゲの武士、がけの土地の広さ）を解釈している。

子どもたちが用いている思考は「ここに〇〇と書いてあるから、△△は～～ということを表しているんだ」という思考である。これは、単に「ここに〇〇ということが書いてある」という思考よりもレベルが上の思考である。つまり、＜資料検索技能＞と＜資料解釈技能＞の両方が培われてきている状態である。

したがって、この授業は「4 資料検索技能を培う道筋」における「7」のレベルに到達し始めている。

(3) 成果と今後の課題

これまでに＜資料検索技能＞はかなり培われた。それは、教室に持ち込む書籍が半年間で3倍に増えてきていることから分かる。(6月：9種類→12月：29種類) これは、教師がキーワードを明示して、キーワードについて様々な書籍から検索する授業を繰り返し行ってきた結果である。

しかし、＜資料検索技能＞は培われてきても＜資料解釈技能＞はなかなか培うことができなかった。本時の授業では、絵の情報を解釈する子が多く見られた。この点は成果である。

反面、本時では検索する書籍群が、これまでの授業より限られていた。これは、絵の情報の解釈に思考の重点があったためである。絵の情報を意味づけするために自分の知識をもとにすることが多かったためである。

資料を検索し、その情報をもとに自分の考えを作り上げていく子どもたちの育成が今後の課題である。そのための方向として、次の点を考えている。

自分でハテナ？を発見し、そのハテナ？について自分で調べて解釈する

という技能である。このような技能が培われた子どもは、自ら学ぶ子どもである。そのためにも、＜資料検索技能＞と＜資料解釈技能＞の両方の技能がより高いレベルで培われる必要がある。

事例2 資料解釈技能を培う授業

— 小5 社会「製鉄所の立地条件」「工業生産と公害」の授業で —

1 どのようにして、図書館を活用する技能を培うか

社会科の授業で調べ学習として、図書館を使わせることが多い。しかし、ただ「調べないさい。」と指示をだして、あとは子ども任せということが多いのではないだろうか。

これでは、子どもに図書館を活用する技能を培うことはできない。

では、どのようにするといいいのか。

図書館の機能を活用するためには、大きく分けて資料検索の技能と資料解釈の技能の二つが必要である。資料検索の技能と資料解釈の技能とは、互いに無関係でなく、一方の技能を培うともう一方の技能も培われる関係にある。資料解釈の技能を伸ばせば資料検索の技能も伸びてくるのである。

そこで、以下本稿においては、資料解釈の技能に焦点をあてて述べる。

子どもが資料を解釈できないのは、まず、資料を読めない、意味がわからないからである。しかし、これは、国語辞典が使えればある程度解決できる。次は、その資料を読んで、その資料から何が言えるか、その資料はどんな意味があるか、わかることである。言い換えれば、資料は「事実」であるから、資料を解釈することは、事実を意味づけることである。しかし、この意味づけが難しい。子どもが調べたとき、本に書いてあることをそのまま写しただけで終わってしまうのはそのためである。

宇佐美寛氏は次のように言う。

2. 「道徳」のある授業は、右の意味での「事実」である。このような事実が与えられただけで、学生は自己の意見を論理的に書けるか。駄目である。ある事実を他のどんな事実と結びつけ、どう意味づけるかを考えられないのである。発想が出来ないのである。だから、意味づけの例を見せたりやるのがいい。

宇佐美寛『読み書きにおける論理的思考』（明治図書）

宇佐美氏は、大学生を相手にした授業で、上記のようにいっている。まして小学生であればできないのは無理もない。

では、どのようにするといいのか。どのようにすると意味づけができるようになるのか。

宇佐美氏は「発想が出来ないのである。」と言っている。発想ができないのは、どのように考えたらいいのか、考える方向がわからないからである。何を考えたらいいのかわからないからである。だから、教師が最初は考える方向を示してやる。考える方向を「問い」として示すのである。子どもは、その「問い」に答える方向で、資料を見て考えればよい。しかも、その「問い」は資料に直接書いてないことを問うのがいい。資料に書いてないから子どもは考える。それが意味づけである。

例えば、「日本の食料生産は大丈夫か」と問う。子どもは、日本の食料自給率や食料の生産量などを調べる。調べた後、それらの統計資料を見ながら日本の食料生産は大丈夫かどうか考えることになる。

また、宇佐美氏は「ある事実を他のどんな事実と結びつけ、どう意味づけるか考えられないのである。」と言う。

だから、授業で、ある事実と他の事実を結びつける授業を行うのである。そうすることにより、ある事実と他の事実との結びつけ方を考えさせる。

2 資料解釈の技能を培う

資料解釈の技能を培うために以下の方法を取る。

① 情報量を増やす

子どもが社会的事象について考えたり問題をもったりできたとする。それは、それ以前に子ども自身にその社会的事象についての情報がある程度蓄積されているからである。情報が蓄積されていなければ、考えようと思っても子どもは考えることはできない。

現在は情報化社会である。だから、子どもは多くの情報を持っていると考える人もいるかもしれない。しかし、現実はそのようなことはない。情報の洪水により、子どもはかえって生の、具体的な情報から遠ざけられている。したがって、その情報が社会的事象についての判断や評価を含ませて作られている場合が多い。

以上のことから、できるだけ子どもには生の情報を与えた方がいい。統計資

料などの記号化された資料より、写真やテレビなどの視聴覚資料の方がいい。見学し、実際に見たり手で触ったりできればもっといい。

例えば、5年農業单元では、まず1軒の専業農家を見学した。見学後、子どもは次のような作文を書いた。

専業農家の人は、お金がかかるということは前から知っていました。けれど、かんそう機1台で、500万円もすると思っていませんでした。一番安いので、25～6万円なんて、とても信じられませんでした。

それから、私が不思議に思ったことは、米の種類がたくさんあるということです。コシヒカリ、もち米だけは知っていました。が、はなひかり、こしじまい、ゆきのせい、にいがたわせ、なかでも一番びっくりしたのは名前は人の名前みたいなひでこもちでした。私は、こんな名前があるとは思いませんでした。私の家では、コシヒカリともち米しか食べたことがないので、ほかの米も食べてみたいと思います。

あと、コシヒカリが栽培しにくいということも知りました。私は、米の育ち方はみんな同じだと思っていました。[以下略]

子どもたちの作文を読むと、次のことを知り驚いていることがわかる。

- 機械の価格、大きさ、数 ◦水田の広さ ◦家の広さ
- 農業をやっている人が2人

以上のように、情報量を増やしてやると、子どもは次の状態になる。

- 資料解釈のための足場ができる。
- 資料検索のためのキーワードが増える。

② 討論による授業を組織する

ある課題に対して子どもが調べたとする。子どもは自分の考えに都合のよい資料だけを収集する。これは子どもだけではない。わたしたち大人も同じである。フランスの科学的犯罪捜査法を教える教室には、次のような文が掲げられているという。

眼は、それが探し求めるもの以外は見ることができない。探し求めているものは、もともと心の中にあったものでしかない。

(向山洋一『すぐれた授業への疑い』明治図書)

子どもは自分の考えに不都合な資料は目に入らない。

しかし、討論においては、いやでも不都合な資料も目に入ってくる。討論においては、一つの事実について一つの見方しか持ち得ないでは、反論に対して対抗できない。討論は、複数の資料を検討する活動を促すことになる。

例えば、5年農業単元で専業農家Kさんを見学した後、機械の値段やその性能・使う日数の資料を示して、次の発問をした。

Kさんにとって機械化は得ですか、それとも損ですか。

得と考える子どもは、次のように言った。

- 機械を使うと楽である。
- 機械を使うとはよい。
- 米はみんなが食べるからもうかる。

損と考える子どもは、次のように言った。

- 高い値段で使う日数が少ない。
- 5～8年で機械を買い替えるので損だ。(教科書に載っていた農業機械耐久年数から考えた)
- 機械に1,525万円かかってはもうからない。

得と考える子どもは「機械を使うと楽である」というように、最初はほとんど思い込みで考えを述べていた。しかし、損と考える子どもに反論されるにしがたい、証拠となる資料を探しはじめた。例えば、機械を使ったときとそうでないときでは、どれくらい作業時間が違うかということに目をつけた。そして次のように言った。

- 10アール当り、機械を使うと30分で終わるが、使わないと10～12時間もかかるから、機械を使った方が得である。
- 手でやると、Kさんの家だと1か月以上かかる。

・1か月以上かかると出荷が遅れる。

討論で相手に反論するためには、相手よりも具体的な根拠をあげる必要がある。また、逆に反論された側から見れば、根拠の不十分さに気づきさらに資料を検索する必要性を持つことになる。また、討論の中で、人の意味づけの方法を学ぶことができる。

3 資料検索・解釈の技能を培う年間計画

どの教材でどのような方法でどのような技能を培うか。以下にその年間計画を示す。(5学年社会科の場合)

月	教 材	授業方法(発問・指示等)	培う学習技能
4	てんぷらそばの材料の自給率のグラフ	◎てんぷらそばは日本らしい食物なのにこんなに輸入しています。日本の食料生産は大丈夫ですか。	・教科書、資料集「ジュニア朝日年鑑」の検索 ・統計資料の解釈
5	専業農家Kさんの農業機械の値段とその性能	◎Kさんにとって機械化は得ですか、それとも損ですか。	・教科書、資料集の検索 ・農業機械と人手との作業の比較
	専業農家と兼業農家との委託契約書	◎このようにKさんとAさんが契約を結ぶと、どちらが得ですか。	・教科書、資料集「ジュニア朝日年鑑」の検索
6・7	浮魚(さんま)と底魚(たい)の実物	◇2匹の魚を比べて特徴をあげる。 ◎このように特徴の違う魚の取り方は同じでしょうか。	・教科書、資料集 図書館にある社会科関係の本の検索
9	身の回りにある工業製品(ラジオ, 時計など)	◇工業製品を分解する。 ◎部品を一つ選んでその作り方を予想しなさい。	・資料集, 図書館にある社会科関係の本の検索

10	製鉄所の写真	<p>◎写真を見て気がついたことをあげなさい。</p> <p>◎（学校の近くの土地に）製鉄所をつくることができますか。</p>	<p>・写真の解釈</p> <p>・教科書、資料集 図書館にある本の検索・解釈</p>
11	仏壇の部品や写真	<p>・現在の仏壇と百年前の仏壇を比べて、あまり変わらないのはなぜですか。</p>	<p>・仏壇づくりパンフレットの解釈</p>
12	水俣病の年表と化学工業の町水俣	<p>◎同じチッソ工場について書かれているのに、書かれ方が違うのはなぜですか。</p> <p>◎昭和35年頃水俣市に住んでいた人はチッソ工場についてどのように考えていましたか。</p>	<p>・年表と文書資料の比較</p> <p>・教科書、資料集 図書館にある社会科関係の本の検索・解釈</p>
1	新聞1日分 数種類の新聞	<p>◇新聞を比較して、それぞれの良さを考える。</p> <p>◎どのような人が、何のために新聞を読むのでしょうか。</p>	<p>・いろいろな人への調査</p> <p>・市立図書館の利用</p>
2	ゴルフ場の写真 ゴルフ場に関係する新聞	<p>◎あなた方の町にゴルフ場をつくるのは賛成ですか、それとも反対ですか。</p>	<p>・いろいろな人への調査</p> <p>・市役所の利用</p>
3	日米の貿易状況を 示す統計 日米の貿易について 見解の違う人の 書いた文章	<p>◎貿易において日本とアメリカではどちらが悪いのですか。</p> <p>◎今後どのようにしたらいいですか。</p>	<p>・統計資料の解釈</p> <p>・経済評論家の書いた文章の解釈</p> <p>・市立図書館の利用</p>

4 授業「製鉄所の立地条件」(10月)

本単元では、最初に製鉄所の16ミリフィルムを見たり写真を見たりして、製鉄所についての情報量を増やした。その後、その前の単元で見学したC工場のそばの敷地(1,400メートル四方)に製鉄所がつかれないか、次のように発問した。

C工場の近くに製鉄所をつくることができますか。

その後、3時間調べる時間をとった。子どもは教科書、資料集のほかに次の図書を使って調べた。一部を示す。

・小学5年の社会(学研)・小学社会科事典(旺文社)・ジュニア朝日年鑑(朝日新聞社)・工業のさかんな地域(国土社)・新社会科用語事典3 鉱工業(国土社)・日本の自然と産業(小峰書店)・よごされる大地(学研)

本時は、調べた後の時間である。次の発問から始めた。

水は、製鉄所をつくるのに大丈夫ですか。それとも大丈夫じゃないですか。

以下、授業記録を示す。

[前略]

T: あっ、一つ忘れていました。座席表を作りました。いつもは名前を書いてメモをしていたので、座席表があるとわかりやすいと思います。

じゃいきましょう。それでは、優くん。

C₁: コロナの近くの土地に製鉄所はつくれないと思います。理由は、製鉄所で作る水は、鉄1トンつくるのに約152トンの水を使うから、五十嵐川の水を使うとしてもそんなにないし、笠掘ダムから取るとしても、遠いから時間がかかるのでつくれないんだ。

C₂: 今、優くんのもあったんだけど、ぼくと剛也くんと勉くんは五十

嵐川の水の量を電話して聞いてみたんだけど、五十嵐川の1秒間に流れる水の量は50トンで、製鉄所で1日に使う水の量は25万トンと教えてくれたんだけど、それで、だいたいの計算をしてみて、でた答えでやってみると水では製鉄所では無理なことではなくて、水の心配はほとんどない。でも、ぼくは製鉄所はつくれないという意見で、

T₆ 外四くんちょっと待ってね、水が大丈夫か大丈夫じゃないかにしましょう。

C₃ 大丈夫。

T₇ さっき1秒間に50トンとあったんだけど、結局五十嵐川にはどれくらいあるの、計算した？

C₄ 1日に432,000トン。

C₅ ぼくは今の外四くんの意見にちょっと反対で、地図を見てください。

T₈ 地図ありますか。ない人は見せてもらってください。

C₆ 見ましたか。

C₇ コロナのところの土地から五十嵐川まで、地下に水道管とかを掘ってやると、地盤が弱いから工場まで運びこめないから工場はできないと思います。

C₈ ぼくは真保くんの意見に反対で、いくら地盤が弱いといっても固めればいいと思います。

C₉ ぼくも拓くんと同じ意見で、真保くんの言ったところから製鉄所に水を送ると、製鉄所はできるかもしれないけれど、そうすると五十嵐川から信濃川に流れなくなる。

C₁₀ 外四くんの意見、大丈夫という意見に反対で、五十嵐川に432,000トン毎日流れているわけじゃないし、1週間や1か月間もったとしてもそれから毎日それ位の水が流れているわけじゃないから、その内なくなってきた大輔くんの言ったように信濃川まで水が流れなくなってしまう。

C₁₁ ぼくは、優くんの意見に反対で、外四くんの言ってるように五十嵐川には432,000トンの水が流れていて、優くんはいつかはなくなると言ったんだけど、なくなりそうなときに笠掘ダムとかからもってくれば大丈夫だと思います。

C₁₂ さっきの優くんの意見に反対で、25万トンと1日に使って五十嵐川に432,000トン毎日流れてくるわけじゃないと言ったんだけど、1日に25万トン使うと後残りが182,000トン残るし、他の住宅にも使われるかもしれないけど、製鉄所では再利用できるみたいだからそう簡単に水はなくならないと思う。

[中略]

T₁₅ 次いきます。調べた人が多い順にいきましょう。公害でいこうと思います。

T₁₆ では、公害についてどうぞ。公害は大丈夫か大丈夫じゃないか考えましょう。

[中略]

C₂₄ 私は、東京の本社に電話して聞いたんだけど、大丈夫といって、理由は公害はこちらの方で計算しているから。

C₂₅ 心配です。勉くんと同じで油とか流れるから心配。

T₂₀ 証拠ありますか。

C₂₆ 本で調べた。

T₂₁ なんていう本ですか。和隆くん、ちょっと探していて。

[中略]

C₂₉ ぼくは心配です。理由は製鉄所は建物が高かったりすると、他の家に日が当たらなくなって市民に迷惑をかけると思います。

C₃₀ 先生、さっきのありました。資料集の104ページ、105ページに載ってるんだ。見ましたか。左上の①の下のところで、有害な物質が海に流れこむと書いてある。

C₃₁ ぼくは心配です。工場とかから有害な物質が出るし、オゾン層という地球のまわりにある薄い膜を破ったりするから心配です。

T₂₃ オゾン層を破っちゃうの。

C₃₂ 煙がやぶる。

T₂₄ 煙が。

C₃₃ 地図帳の55ページにでています。

T₂₅ 確認して。

C₃₄ その工場のせいで、

T₂₅ どれを見ていいのかわかりません。

C₃₅ あっ、①を見てください。見ましたか。そうすると、第二水俣病とかぜんそくとかイタイタイ病とか、工場のための病気になってしまいうから心配です。

C₃₆ 資料集の104ページを見てください。さっき和隆くんの言った意見に反対で、①のところのタンカーによる事故による流出と書いてあるから。

[中略]

C₄₀ 資料集の67ページを見てください。見ましたか。「排出ガスが原因でおこる公害に、酸性雨があります。酸性雨は、樹木をからし、川や湖に魚がすめないようにします」と書いてあります。だから心配です。

T₂₈ 酸性雨に関係があるんですね。時間がなくなってきてしまいましたね。

C₄₁ えっー。

T₂₉ 言いたい？ では、あと4人、順番にいきましょう。

C₄₂ 今、酸性雨を調べたらなくて、酸性を引いたら酸を持った性質と書いてあって、酸はだいたい毒であるから川とかに影響を与えると思う。

C₄₃ ぼくは油とか取りのぞくものがあると載っていたから大丈夫で、清くんが言っていた公害防止設備なんだけど、煙の中からほこりやごみ、砂などを取りのぞく装置や重油などからいおう分を取りのぞく装置があるから大丈夫だと思います。

[後略]

5 授業「工業生産と公害」(12月)

本單元では、水俣病のビデオを見たり、水俣病について図書で調べた結果、次の2枚の資料を提示した。

水俣病の年表(資料1)

1932年(昭和7年)

5. 7 日本窒素水俣工場で、廃水を処理しないで百間港に流す。

1945年(昭和20年)

8. 15 敗戦

1946年（昭和21年）

- 2 月 日本窒素水俣工場、アセトアルデヒド、合成酢酸の製造を再開する。廃水は百間港に処理しないで流す。

1950年（昭和25年）

- 1 月 日本窒素肥料株式会社が新日本窒素肥料株式会社として再発足する。

1951年（昭和26年）

8. 22 水俣漁業組合が窒素工場に「財政が苦しい」と頼み、50万円を無利子で借りる。その代わりに、「窒素工場で害毒が生じてでも一切異議を申し立てず、優先的に埋め立てを認める」という約束をする。

1953年（昭和28年）

12. 15 溝口トヨ子（水俣市出身 5歳11か月）発病する。その後第1号患者に認定される。

1956年（昭和31年）

5. 1 窒素付属病院は「今までに例のない病気が発生した」と、4人の患者が発生したことを保健所に報告する。

1957年（昭和32年）

1. 17 水俣漁業協同組合は、窒素工場に対して悪水を海に放流することを中止するように頼んだ。
- 1 月 熊本大学医学部が、「水俣病の原因は重金属、それも窒素工場の廃水に関係がある」と発表する。

1958年（昭和33年）

- 9 月 窒素工場は、廃水の経路を百間港から水俣川河口に変更する。昭和35年以降、水俣川河口の近くで患者が増える。

1958年（昭和34年）

8. 6 水俣漁業協同組合は魚屋の組合とともに窒素工場にデモに行く。この時の話し合いでは、漁業の補償として1億円、ヘドロを除くこと、浄化装置をつけることなど要求する。窒素工場は「水俣病の原因が未確定である」として、50万円と回答した。
8. 12 漁業協同組合が窒素工場と2回目の話し合いをする。窒素工

場は300万円と回答した。「ヘドロを除くことについては水俣湾は公海なので、工場の独断ではできない」と答える。怒った漁民多数が、話し合いの会場へ乱入する。

1960年（昭和35年）

3. 25 熊本大学研究班が研究論文「熊本県水俣地方に発生したいわゆる水俣病の研究」（第4報）を発表する。この中で、水俣病の原因は有機水銀にあるとした。

『ドキュメント日本の公害』川名英之著 1987年（昭和62年）

—— 化学工業の町水俣（資料2） ——

水俣は、日本窒素肥料会社によって都市になったといえる。〔中略〕

この地はもと小さな農漁村にすぎなかったのであるが、工場の設立ともなって人口が急速にふえ、また、1926（昭和1）年に鹿児島本線が、1934（昭和9）年に山野線が開通し、天草諸島への航路も開かれて交通の要衝となると、林・水産物の集散地として、商業も次第に活気をおびるにいたった。とくに、1927（昭和2）年の水俣工場の拡張は、人口のさらに急激な増加をもたらし、工業都市として飛躍的に発展する契機となった。

1949（昭和24）年に市になり、翌年工場も新日本窒素と名を改めた。現在水俣工場には、約4,000人の従業員が、硫酸や硫化磷安・硝酸・酢酸・塩化ビニールなどを主に、その他、多種の製品の生産に従事している。これは水俣市の工業人口の約80%にあたる。中小工場の大部分は食料品・土石・製材木製品工場で、その数はさほど多くない。下請けの金属機械工場が5工場ある。市の工業製品の出荷額は約92億円である。

新窒素水俣工場の製品は、内地はもちろんのこと、沖縄・台湾・東南アジアに輸出されている。原料の石灰石は天草の近海の島々より、石炭は北九州よりそれぞれたやすく入手できるし、会社専用梅戸港は、3,000トン級の船の停泊が可能である。電力も背後の九州山地に豊富に求めることができた。現在12か所の火力発電所を会社で持っており、88,000キロワットを得ている。このようにすぐれた立地条件があるから、大きな工場として発展したのであり、これがまた水俣の発展であったといえる。〔後略〕

〔岩本政教・牧寺輝孝〕

『日本地理風俗体系』第12巻 九州地方（下）1960年（昭和35年）

まず、次の2つの発問で授業をした。

- 同じチッソ工場のことなのに書かれ方が違うのはなぜですか。
- 資料2に、水俣病の原因がチッソ工場にあると書けますか。

本時は次の発問で始めた。

昭和35年頃水俣市に住んでいた人は、チッソ工場についてどのように考えていましたか。

以下、授業記録を示す。

C₄ ぼくも麻美さんの意見と同じでおこっていると思います。理由は、教科書78ページの1行目を見てください。見ましたか。そこに「水俣病の患者や家族の人々は工場の無責任な態度におこって工場を裁判所に訴えました。」「おこって」ということだからやはりチッソ工場のことがいやだったと思うし、あと教科書77ページの年とできごとが書いてあるところなんだけど、そこにもやっぱり「1969年と1972年に患者が工場を裁判に訴える。人間環境会議（国連）に患者が出席し水俣病を世界に訴える。」裁判にかけたり訴えたりしているからチッソ工場のことをいやだと思っています。

T₄ 訴えたのは患者だけなんだろうかね。

C₅ 患者が出席して訴えた。

C₆ 「新日本窒素水俣工場の出す廃水が疑われました。がしかし、有機水銀など出してないと否定しました。」と書いてあって、ここで認めなかったから、おこっていると思います。

C₇ ぼくも、勉くんと同じで、おこっていると思います。理由は、資料1の1978年の8月12日を見てください。見ましたか。そこに、最後の行のところに、「おこった漁民たちが話し合いの会場に乱入する」と書いてあるから、おこったと思います。

C₈ チッソ工場は悪い工場だと思っています。水俣病になった

人が684人もいて、その内死んだ人が115人もいるから悪い工場だと思っています。

- C₉ ぼくはおこっていると思います。理由は、教科書の78ページを見てください。見ましたか。「水俣病の患者や家族の人々は工場の無責任な態度におこって工場を裁判所に訴えました。」と書いてあるからおこっていると思います。

〔中略〕

- C₂₀ 私は、資料1の1958年のところに、「水俣病の原因は未確定であるとして、50万円と回答する」と書いてあるけれど、その前に、1957年のところに、「水俣病の原因は重金属、それもチッソ工場の廃水に関係がある」と書いてあって、チッソ工場は自分たちが流しているということがわかっているのに「未確定である」といって自分たちは流していないといっている。だから、水俣市に住んでいる人はチッソ工場が悪いと思っています。

- T₁₀ 2回目、3回目の人でもいいですよ。

- C₂₁ ぼくは、あまりいい工場でないにつけたしで、有機水銀を流し続けたのだから「あまり」でなく「完全に悪い工場」だと思っています。

- T₁₁ ということは、悪い工場ですね。

- C₂₂ ぼくは、悪い工場に反対で、78ページを見てください。「水俣病の患者や家族の人々は工場の無責任な態度におこって工場を裁判所に訴えました。」と書いてあるけど、資料の2を見てください。チッソ工場のいいところを書いてあるけど、いいところもあるのだから悪いというのに反対です。

- C₂₃ 勉くんが言ったように、工場は廃水を出していないといったけれど資料1の1960年を見てください。そこには「有機水銀による」と書いてあるから水俣の人はおこっていると思います。

- C₂₄ 私は悪い工場につけたしで、資料2には、チッソ工場の悪いところは載っていないし、チッソ工場のおかげで都市になったと書いてあるから悪い工場とは言えないと思います。

- C₂₅ ぼくは、意見が変わって悪いんだけどいいところもあると思います。

- T₁₂ あわてなくてもいいんだよ。じゃ、あとでね。

C₂₈ ぼくは、悪いといった栄治くんの意見に反対というわけじゃないんだけど、賛成はしない。さっきいろいろ言ってたんだけど、有機水銀で水俣病にかかっていやだと思っていると、栄治くんとかが言ったんだけど、水俣市に住んでいる人がチッソ工場についてどのように考えていたか。これは栄治くんたちは水俣病にかかっている人がいるのにまだ流し続けたからおこっているんじゃないかと言うんだけど、これはやっぱり、水俣病にかかった人はチッソ工場のことをなんていやな工場なんだ、悪い工場なんだと思っていたけど、かからない人とかそういう人はチッソ工場のおかげで大きくなったのだから、そういう人はもしかしたらチッソ工場はいい工場だと思っているかもしれない。だから、栄治くんたちの意見には納得できません。

[中略]

C₃₀ ぼくは、水俣病になった人や水俣病になった人の身内の人は、たとえばチッソ工場がどんなにいいことをしてきても、そういうことをされればおこると思うし、いやだと思うのは当たり前だと思う。でも、水俣病にかかってない人は、水俣病になった人をいやだと思う人もあるし、チッソ工場をいい工場だと思っている人もいると思う。

C₃₁ さっきの続きで、悪い工場といっても、チッソを辞典で引くと肥料とか出ていて、人間に必要なものを作っているわけだから、なければならぬものを作っているから悪い工場とは言えないと思います。

[後略]

6 授業の分析

(1) 子どもの情報量を増やす

製鉄所の16ミリフィルムや写真を見せることにより、考える足場となる情報は蓄積された。授業記録には表れていないが、「C工場の近くに製鉄所をつくることができますか」と発問した時、最初の予想の根拠は、16ミリフィルムや写真から得た情報であった。また、「何を調べますか。」と問うたところそれらの情報をもとに、製鉄所の立地条件である、土地、水、原料、働く人などの観点をあげてきた。

(2) 討論による授業を組織する

討論は子どもに具体的に考えることを要求する。例えば、事例1に次のような子どもの発言がある。

C₁₂ さっきの優くんの意見に反対で、25万トンで1日で使って五十嵐川に432,000トン毎日流れてくるわけじゃないと言ったんだけど1日に25万トン使うと後残りが182,000トン残るし、他の住宅にも使われるかもしれないけれど、製鉄所では再利用できるみたいだからそう簡単に水はなくならないと思う。

水がなくなるという考えに反論して、どれくらい残るのか計算して発言している。この子どもは、その前に次のように発言している。

C₂ 今、優くんのもあったんだけど、ぼくと剛也くんと勉くんは五十嵐川の水の量を電話して聞いてみたんだけど、五十嵐川の1秒間に流れる水の量は50トンで、製鉄所で1日に使う水の量は25万トンと教えてくれたんだけど、それでだいたいの計算をしてみて、でた答えでやってみると水では製鉄所では無理なことじゃなくて、水の心配はほとんどない。[後略]

私は、この発言した後、計算した数値を確認している。

つまり、この子どもは、水の量にかかわって次のことをしたことになる。

- ① 五十嵐川に流れる水の量と製鉄所で使われる水の量を聞く。
- ② 聞いた、五十嵐川に流れる水の量が、1秒間当たりだったので計算して1日に流れる水の量を求める。
- ③ 反論されたので、五十嵐川に流れている水の量から製鉄所で使う水の量を引いた数値を示した。

また、この授業後、C₁₂の発言にあった「他の住宅にも使われるかもしれないけれど」と、はっきりしなかったところを調べていた。

また、事例2ではC₂₁の発言までは、次のような発言があった。

- いやだと思っている。 ◦ あまりいい工場でないと思っている。
- おこっている。 ◦ 悪い工場だと思っている。
- 水俣病の原因がチッソ工場だと思っている。

ここまではおよそ、水俣の市民はチッソ工場を悪い工場だと思っている考えが出されている。根拠となる資料も同じようなところが指摘されている。

しかし、C₂₂の発言をきっかけにして違う考えも出され始めた。

C₂₂ ぼくは、悪い工場に反対で、78ページを見てください。「水俣病の患者や家族の人々は工場の無責任な態度におこって工場を裁判所に訴えました。」と書いてあるけど、資料の2を見てください。チッソ工場のいいところを書いてあるけど、いいところもあるのだから悪いというのに反対です。

この後、次のような発言が続く。

- C₂₅ ぼくは、意見が変わって悪いんだけどいいところもあると思います。
- C₂₆ ぼくは、悪いといった栄治くんの意見に反対というわけじゃないんだけど、賛成はしない。[中略]これはやっぱり、水俣病にかかった人はチッソ工場のことをなんていやな工場なんだと思っていたけど、かからない人とかそういう人はチッソ工場のおかげで大きくなったのだから、そういう人はもしかしたらチッソ工場はいい工場だと思っているかもしれない。だから、栄治くんの意見には納得できません。
- C₃₀ ぼくは、水俣病になった人や水俣病になった人の身内の人は、たとえチッソ工場がどんなにいいことをしてきても、そういうことをされればおこると思うし、いやだと思うのは当たり前だと思う。でも、水俣病にかかってない人は、水俣病になった人をいやだと思う人もいるし、チッソ工場をいい工場だと思っている人もいると思う。
- C₃₁ さっきの続きで、悪い工場といっても、チッソを辞典で引くと肥料

とか出ていて、人間に必要なものを作っているわけだから、なければならぬものを作っているから悪い工場とは言えないと思います。

つまり、C₂₂の発言をきっかけにして、視点の転換が行われたのである。「チッソ工場は悪い」という視点から「チッソ工場は良い」という視点から考えている。水俣病の患者・その身内の視点から水俣病に関係のない市民の視点から考えている。これが新たな発想というものである。この視点の転換を促したのが討論である。

資料を解釈することは、「事実を意味づけること」である。と前述した。事実を意味づけるためには何らかの視点がある。討論は、その視点を多様に提供する。討論の過程で、自分の気がつかなかった視点に気づくことができる。

(3) 学習技能

事例1は10月の実践で、事例2は12月の実践である。比較すると、子どもにどのような技能が培われているか見えてくる。

まず、事例2の方が、根拠にあげる資料を明確にして発言している。

事例1でも資料をもとにした具体的な発言もあるが、次のような発言もある。

C₂₅ 心配です。勉くんと同じで油とか流れるから心配。

何を根拠にしているかわからないので、私は次のように働きかけている。

T₂₀ 証拠ありますか。

C₂₆ 本で調べた。

T₂₁ なんという本ですか。和隆くん、ちょっと探していて。

しかし、事例2では、次のような発言が多い。

C₉ ぼくはおこっていると思います。理由は、教科書の78ページを見てください。見ましたか。「水俣病の患者や家族の人々は工場の無責任な態度におこって工場を裁判所に訴えました。」と書いてあるからおこっていると思います。

(4) 内部情報と外部情報

個人内に蓄積された情報を内部情報と呼び、それ以外の情報を外部情報と呼ぶことにする。

宇佐美氏は次のように言っていた。(前掲書よりもう一度引用する。)

ある事実を他のどんな事実と結びつけ、どう意味づけるかを考えられないのである。

「ある事実」と「他の事実」は、二つとも外部情報でもいいが、ひとつは内部情報でもいいわけである。そうすると、二つとも外部情報の場合は、その二つを示すか、子どもに調べさせればよい。しかし、一つが内部情報の場合は、その内部情報を思い出させて使わせなければいけない。

どのようにして、この内部情報を思い出させて使わせればいいのか。

内部情報の一つに経験がある。宇佐美氏は、有田和正氏の発問「バスの運転手さんは、どこを見て運転していますか。」を分析して、次のように言う。

経験された事実について詳細に具体的に語らせるためには、身分語でなく知覚語で発問すべきである。

『現代教育科学』No.341, 1985年, 4月号(明治図書)

向山洋一氏は次のように言う。

教師は、まず内部情報を再構成してやるべきである。(あるいは再構成の方法を<例えばK J法>を教えるべきである。)

向山洋一『飛翔期 向山洋一実物資料集 第6巻』(明治図書)

有田和正氏は、歴史学習についてであるが、次のように言う。

歴史を歴史として学習するか、歴史を現在の生活と結びつけて学習するかで、子どもへの定着度がちがってくる。

有田和正『6年生に育てたい学習技能』(明治図書)

このようなことを有田氏は意識しているから、子どもは次のように発言する。

小川 私は、「熱い戦争」というのは、男の子の殴りあうけんかで、「冷たい戦争」というのは、女の子のけんかだと思うんだけど。(大笑)

T 最近、男の子が冷たい戦争をやるんだよね。

小川 男の子は、まあ、すぐに殴りあって、それで終わっちゃうけど、女の子の場合は、根にもって、陰でやりそうだから、すごく長く続いちゃって。(笑) その冷たい戦争もこのように長く続いてて、そっちの冷たい戦争はずっと続いてて、結局、朝鮮半島で何か二つに分かれちゃって、朝鮮戦争が起きたんでしょ。

『社会科教育』 '91. 8月臨時増刊号(明治図書)

内部情報を思い出させる方法として、宇佐美氏の「知覚語で発問」することを、向山氏の「KJ法」を使うことができる。では、有田氏はどのような方法をとっているのか。有田氏は明示していないが、わたしは「はてな帳」にその秘密があると考え。「はてな帳」は子どもの疑問から出発している。つまり、子どもの疑問は、自分の内部情報と外部情報を比較することから生まれている。だから、子どもは常に内部情報との対応で考えていることになる。

ここまで、他の実践を引用して述べたのは、本稿においてこのことを実践として述べるができなかったからである。情報量を増やすことは述べた。しかし、蓄積された内部情報をどのように思い出させて、使わせるといいのか、示すことはできなかった。これができる、資料解釈の技能も伸びると考える。今後の課題としたい。

事例3 資料検索の技能を培う国語科の授業

— 小5国語『説明文』の授業で —

1 図書館の機能活用の現状

図書館の機能とは、『情報（資料）がある』ことである。よって、図書館の機能活用をするとは「図書館の情報（資料）を調べる（検索する）」ことである。

国語科において資料検索ができる児童の具体的な姿は次のとおりである。

必要な資料を必要な時にさがしだすことができる児童

このためには、必要な資料をさがしだすための技能が身につけていなければならない。

また、必要な資料が身近にあるという環境も整備しなければならない。

ところが国語の授業においておよそ次のような問題点がある。

教室で国語の授業をする

読書、その他の調べ学習で図書館で授業を行う場合はある。しかし、国語の授業はほとんどの場合、教室で行われている。

必要な資料をさがしだす技能を身につけるため、必要な資料が身近にあるという環境を設定するためにも意図的に図書館で授業を行う必要がある。

2 図書館の機能活用を促すために

(1) 授業で培う学習技能

図書館の機能活用に関して授業で培うおよその学習技能として、次のものを考えた。

①資料が図書館にあることがわかる。

- ②資料が図書館のどの場所にあるかわかる。
- ③資料がどのような仲間（分類）の本なのかわかる。
- ④資料は同じことが別の本にも書いてあること。
- ⑤同じ項目でも資料によって書かれ方に違いがあること。
- ⑥調べる項目を索引等を使って調べること。
- ⑦調べる項目を索引等がない場合、似た言葉、言い換えた言葉、まとめた言葉を使って調べること。
- ⑧資料に必要なことが書かれていない場合に関連項目、他の事典類を使って調べること。

これらの技能は一回の指導では身につかない。谷川彰英氏は技能習得に関して次のように述べている。

技能とはあることが「できる」ようになることですし、またその能力のことです。

その技能習得過程は大きく四つに分けることができるでしょう。

一例としてワープロが「できる」ようになる過程で説明してみましょう。

最初の段階は、ワープロという機械を知る段階です。初心者はず、どこをどうすればどのようなことができるのかについて、マニュアルを見たり人のアドバイスを受けながら「習う」のです。

第二の段階は、個々ばらばらに習得された要素（例えば漢字への変換とか印字の仕方など）が連合される段階です。

第三の段階は、それら連合されたものが、さらに統一されたものとなり、全体行動としてまとめられる段階です。いわば、何とか一枚の原稿が打てる段階ということです。

第四の段階は、意識しなくてもごく自然にできるようになる段階です。いわばひとつの流れをマスターした段階です。

以上の四つの段階はどのような技能を習得する場合でも、経ていく過程なのです。

「変化をとらえる技能をどう育てるか」社会科教育No.357

明治図書 p 12～p 13

資料検索技能も同様な段階を経ていく。同じ「技能」だからである。また、技能であるからこそ何回もの指導の繰り返しが必要である。

(2) これまでの授業の改善

授業の改善のために行うことは次のことである。

- ① 辞書を引く習慣をつけるために授業時間の中で配慮する。
- ② 学習を通して資料検索の技能を身につけさせる。

①について

辞書は情報（資料）のひとつである。ところが、普通の授業の中では辞書を引く回数は圧倒的に少ない。指導計画の中に位置付けられているが、現実には授業中に辞書を引く回数は少ない。家庭学習を含め、辞書を使って言葉調べをすればそこで学習は終わりである。そして、分からない言葉が出てくると「言葉調べのノートを見なさい」という指示がされる。これでは技能の習熟がなかなか進まない。

辞書を引く習慣をつけなければならない。辞書は最も簡便な図書館とも言える。辞書を引く習慣が身につくということは資料検索技能を身につけた児童のひとつの姿である。

②について

資料検索の技能は学習を通して身につけさせなければならない。技能だけを学ぶのではなく、国語（他の教科も含めて）の授業の中で調べなければ解決できないような状況のなかで技能を身につけさせる。

また、授業においては調べざるを得ないようにするため、教材の提示の仕方も考えなければならない。

3 学習の技能を培う年間計画

5年生の国語科における資料検索の技能を教材ごとにどのような方法で培うのかを示す。

月	教材名	授業方法	培う学習技能	留意点
4	その日が来る ＜作文＞ 私は新聞記者	作品の構成、 入物の言動に 着目させる。 学習したこと、 生活の中で訴 えたいことを 記録させる。	<ul style="list-style-type: none"> 辞書を引く。 物語の本をさがして読む (教材文とは対比的な主人公の本を紹介する。) 参考図書をさがす。 新聞記事をさがす。 	<ul style="list-style-type: none"> 辞書を引かせる時間を授業時間の中で確保する。 意見の書き方のアウトラインを示す。
5	虻，春，われは草なり ＜作文＞ 学校生活から	連の構成，比 喩，対比，リ ズムを理解さ せる。 作文の推敲に 辞書を使用さ せる。	<ul style="list-style-type: none"> 詩の本をさがし，教材文と比べながら読む。(詩と物語の配架の位置，ラベルの違いが分かる) 漢字，言葉使いなどを調べるために辞書を使用する。 	<ul style="list-style-type: none"> 同じ作者の本，構成の似ているものなどを紹介する。 漢字を何個以上使うなどのめあてを持たせる。
6	西之島新島 大陸は動く	文章構成，叙 述の仕方，表 現上の工夫に ついて読み取 らせる。	<ul style="list-style-type: none"> 地名を地図の索引等を使って調べる。＊西之島 参考図書をさがす。 調べる事項をまとめた言葉（概念）や関係する言葉から調べる。 ＊ウエゲナー ＊大陸移動説 	<ul style="list-style-type: none"> 教材文にある地図，図等を抜いたものを提示する。

7	おみやげ 宇宙人の宿題	二つの作品を読み、共通点、相違点を比べる。	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 物語の本をさがして読む（できれば、教材文とは対照的な作品を紹介する。） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同じ作者の本、構成の似ているものなどを紹介する。
9	大造じいさんとガン ＜作文＞ 一枚の地図から	<p>大造じいさんの残雪に対する気持ちの変容をとらえる。</p> <p>作文の推敲に辞書を使用させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 必要な事項について調べる。 * 数種類の事典、参考図書を比較、検討する。 * ガン * ハヤブサ ◦ 漢字、言葉使いなどを調べるために辞書を使用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 必要に応じて、コピーして配布する。 ・ 用字用語辞典の使い方も指導する。
10	食物保存の工夫 三人の旅人たち	<p>文章構成、叙述の仕方、表現上の工夫について読み取らせる。</p> <p>場面の反復、人物の対比から主題を読み</p>	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 百科事典を使う。 ◦ 参考図書をさがす。 ◦ 調べる事項をまとめた言葉（概念）や関係する言葉から調べる。 * 保存 * みそ * つけもの * 事例を予想する時に事典、参考図書等を使用する。 ◦ 辞書を引くことに習熟する。 ◦ 物語の本をさがして読む 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 題名、書き出しの段落を提示し事例について予想させる。 ・ 百科事典の索引についても指導する。 ・ 本の置いてある場所

		取らせる。	* 日本の物語と外国の物語の分類の違いが分かる。	の違いにも気づかせる。
11	言葉の感じ 感動を書く	和語、漢語による言葉の感じの違いに気づき、使い方に気をつけて書かせる。 名詞止め、反復、対比、比喩表現を使い詩を書かせる。	◦ 辞書を引くことに習熟する。 * 漢和辞典を使用させる。 ◦ 言葉使いなどを調べるために詩の本を参考にする。 * ジュニアポエム、叢書等を利用する。	◦ 辞書を常に使用させるように配慮する。
12	赤十字の創立者 アンリー＝デュナン	デュナンの行動を年代順に読み取らせる。	◦ 人物の業績、人名、地名などについて百科事典、地図、人物事典、歴史事典、参考図書等を使い調べる。	◦ 必要に応じてコピーをして、配布する。
1	わらぐつの中の神様 漢字の成り立ちと組み立て	物語の構成を考えながら人物の心の変容を読み取らせる。 象形、指事、会意など漢字の成り立ちに	◦ 辞書を引くことに習熟する。 ◦ 物語の本をさがして読む。 * 目録の利用の仕方を指導する。 ◦ 辞書を引くことに習熟する。 * 漢和辞典を使用させる。	◦ 同じ作者の本、構成の似ているものなどを紹介する。

	ねむりについて	<p>ついて理解させる。</p> <p>文章構成，表現の工夫を読み取り要旨をとらえさせる。</p>	<p>・百科事典を使う。</p> <p>・参考図書をさがす。</p> <p>・調べる事項をまとめた言葉（概念）や関係する言葉から調べる。</p> <p>*ねむり→すいみん</p>	<p>・図と文章の対応を検討する。</p>
2	<p>漢字二字でできた熟語</p> <p><作文> 問題をとらえて</p> <p>なかまの言葉</p>	<p>熟語の構成に気づき語彙を拡充するために辞書を使用する。</p> <p>作文の推敲に辞書を使用させる。</p> <p>意味の似た言葉を集めるために辞書を使用する。</p>	<p>・辞書を引くことに習熟する。</p> <p>*漢和辞典を使用させる。</p> <p>・漢字，言葉使いなどを調べるために辞書を使用する。</p> <p>・辞書を引くこと。</p> <p>*類（義）語辞典の使い方を知る。</p>	<p>・対になる関係，似た意味による組み合わせなど</p> <p>・その他の種類の辞典にもふれる。</p>
3	木龍うるし	人物の行動，考え，心の変容を読み取る。	・辞書を引くことに習熟する。	

◎他の教科の時間でも，辞書，辞典，参考図書等を使用するようになる。

4 説明文の授業

(1) 単元名 文章構成を考えながら ― 『海から来た宝石』（大書 5 年）

(2) 単元と学習技能の育成

説明文では「何が書いてあるのか」「筆者は何が言いたいのか」「筆者が言いたいことと事例が対応しているか」「筆者の文章表現上の工夫は何か（言葉文、段落）」を児童が問題意識として持ち、読み進めていけるようになればよい。

この問題意識を持たせるために教材提示の仕方を工夫して（題名だけ提示する、文を分けて提示する、意味段落をバラバラにして提示する）授業を行ってきた。この際に、提示の仕方をいろいろと組み合わせ、上記の説明文に対する問題意識を持たせるようにした。

また、このことをすると同時に自ら読み進めていけるために、疑問が出てきたら教科書以外の資料をさがし、読むということができなければならない。そのため、まず、国語辞典を引くという活動を授業の中に意図的に設けてきた。また、必要に応じて学習に関係する資料を教師が提示し、次のことを指導してきた。

- ①資料が図書館にあることがわかる。
- ②資料が図書館のどの場所にあるかわかる。
- ③資料がどのような仲間（分類）の本なのかわかる。
- ④資料は同じことが別の本にも書いてあること。
- ⑤同じ項目でも資料によって書かれ方に違いがあること。
- ⑥調べる項目を索引等を使って調べること。
- ⑦調べる項目を索引等がない場合、似た言葉、言い換えた言葉、まとめた言葉を使って調べること。
- ⑧資料に必要なことが書かれていない場合に関連項目、他の事典類を使って調べること。

国語辞典、漢和辞典に関してはかなりの子どもたちが使用することに抵抗なく取り組んでいる。①～⑧のことは指導はしてきたが習熟しているとは言えない。

1 回の指導ではなく、何回にもわたって指導を繰り返す必要がある。さらに資料検索の技能を高めていかなければならない。

児童は説明文では次の教材を使って学習を行った。

『西之島新島』→ 挿絵をぬいて提示，文との対応関係を考えさせた。そして，西之島の位置をさがした。

* 索引を使って必要な項目を調べる。(地図)

『大陸は動く』→ 挿絵をぬいて提示，文との対応関係を考えさせた。また3枚の地図を提示し，どれが正しいかを考えさせた。

* 似た言葉，言い換えた言葉，関連する言葉から必要な項目をさがし出す。(大陸移動説，ウェゲナー)

『流水の役わり』→ 前半の段落だけ提示する。(主張，事例1) この後に書(大阪書籍5年) いてあることを予想する。(どのような事例が書いてあるか。)

* 関連項目，他の事典類を調べること。

(流水→海水；3種類の百科事典)

百科事典，参考図書は児童分がない場合には必要なところをコピーして配布した。

「題名と文の内容の関係」・「挿絵と文の内容の対応」・「問題提起と筆者の意見の対応」の検討を通して「何が書いてあるのか」「筆者は何が言いたいのか」「筆者が言いたいことと事例が対応しているか」に関して児童は問題意識を持って読むようになってきたが習熟しているとは言えない。また「筆者の文章表現上の工夫は何か(言葉，文，段落)」についてはさらに学習していかなければならない。

本単元では，今までの学習の習熟を図る。特に，百科事典を使う技能を高めるため「流水の役わり」，「海から来た宝石」(大阪書籍5年)を教材として使用する。「流水の役わり」の授業について上記のとおりである。

「海から来た宝石」では，最初の段落と結論の部分を提示する。この際，地図等の図は抜いておく。そして，事例として何が書いてあるかを予想させる。この学習の中で，百科事典で問題となる項目をさがしたり，地図(図書館にある大型のもの)を索引を使って調べるなどの検索技能の習熟を図る。

百科事典，地図共に児童分はない。そこで，授業の中では予めコピー等をして用意しておく。問題となったところで児童に資料をさがさせ，さがし方を確認したところで，教師から配布していくという形をとる。

(3) 本時で育てる学習技能(1/6)

本時では、教材文の一部(最初の事例の一部、筆者の結論の一部)を提示する。このことから、筆者の主張と事例の対応について考えさせたい。特に「サハラさばく」、「いろいろな場所」、「山からもとれるのです」という言葉から事例が複数存在することに気づかせたい。(発問『この文と文の間には何が書いてありますか。』)

こうすることで、児童は題名、筆者の主張と事例が対応しているかどうかを検討する。この時国語辞典だけでは「場所」に関する情報を得ることができない。そこで百科事典、参考図書を調べさせる。この時何を調べるのかを明確にする。

「いろいろな場所」という言葉を手がかりにして、『ではどこで塩は取れるのか』ということを確認にする。このことから、児童は、関係する図書の分野がわかり、図書館のどの棚をさがせばいいのかははっきりしてくる。この課題に関する分野として、児童は総記(事典)、自然科学等を選ぶことが考えられる。

情報をさがす時間を5分、検討する時間を10分設定する。さがした児童からはどのようにして関係する本を選んだのかをみんなに知らせてもらう。また百科事典から関係する項目が指摘された場合には教師の方からそのコピーを配布する。児童がうまくさがせない場合にも同様に、配布する。

(4) 授業記録

移動式黒板に段落ごとに短冊にした教材文をはった。

(最初の事例の一部と主張の部分は話して提示)

黒板の教材文を範読した。

範読が終わった後つぎの指示をした。

指示1

考えながらまる読みで読みなさい。

一人が一文ずつ順番に読んでいった。

辞書を引きたければ引いてよいという指示も行った。

児童の中にはすでに「あ、またあのやり方だ」というつぶやきがあった。

おかしい文章だ。

何か抜けているところがあるぞ。という意識ができていた。

児童は提示された教材文の間にどのようなことが書いてあるかという意識で音読をした。

指示2

全員で1回読みます。読み終わった人は目で読んでいなさい。

全員が音読をした。

ここで発問をしようとしたら児童から次のような発言があった。

この文章は、「～なぜ塩があるのでしょうか。」と書いてあって、突然に「このように～」となっているのはおかしい。

だからこの文章の間には何か書いてある。

他に二人の児童が同じような発言をした。

児童の発言が発問と同じようなことになってしまったが次の発問をした。

発問1

この文とこの文の間にはどんなことが書いてありますか。ノートに書きなさい。時間は5分です。

児童はおよそ次のような意見を言った。

- ・塩のことが書いてある。
- ・塩がどうやってサハラ砂漠でできるのかが書いてある。
- ・山で塩がどうやってできるのかが書いてある。
- ・題名から考えて「宝石」のことが書いてある。
- ・岩塩のことが書いてある。
- ・「地球上のいろいろな場所からとれます。」と書いてあるからサハラ砂漠以外の場所のことも書いてある。
- ・「このように～」は、前の文をまとめる言葉だけどそのまとめようとする文がない。まとめの文に「いろいろな場所からとれます。」と書いてあるので「塩が取れるところ」が書いてあると思う。

この発言が終わった後、発問をした。

発問2

塩がどこでとれるかは教科書だけでは予想しにくいようです。図書館の本棚のどこへ行って調べますか。グループで相談しなさい。

約2分後、班ごとに発表させた。

(6班あるが、同じ考えのところもあった。)

- ・百科事典で「塩」を調べてみたい。
- ・岩塩を国語辞典で調べ、土の中にあるとあったのでそれを百科事典で詳しく調べる。
- ・理科の実験でもやっているから理科に関係した本だと思う。
- ・とれる場所のことだから社会に関係した本だと思う。

この後資料をさがさせた。

百科事典を使用した班は2つであった。使用した事典は『21世紀大百科』(小学館)と『学芸百科エポカ』(旺文社)であった。どちらの班とも「塩」を調べた。しかし、内容が多過ぎて、必要なことをさがせなかった。

塩を理科の本で調べようとした班は持ってきた本の目次を調べることで終わってしまった。

また、「山からもとれるのです」という言葉から、山に関係した本を持ってきた班、「サハラさばく」という言葉からサハラさばくのことを書いてある本をさがそうとした班があった。

そこで教師の方で、あらかじめ用意しておいて、資料を配布し考えさせた。(「ベスト教科事典」学研から「塩」、「岩塩」を使用)

この資料の「岩塩」にある「北アメリカ、ドイツなどに多く産する」という文から、おそらくこのことが書いてあるのではないかと発言した児童がいた。

ここまでの発言で、次の時間にさらに資料をもとに考えてみることを告げ、この時間を終わった。

5 授業の分析

説明文を読む際の問題意識についてはほとんどの児童が持っていた。またそれまでの学習が習熟していたため、発問をしなくても児童は何を考えるか、何を手がかりに学習を進めるかがわかっていた。

しかし、資料検索の技能を育てる面での授業としては次の点が問題であった。

- (1) 適切な事典、図書類の選択
 - (2) 調べる対象をはっきりさせること

(1)について

小学生むけの事典があるにもかかわらず、事典を選んだ班は「ベスト教科事典」を選択しなかった。

これは、この前の学習「流水の役わり」において、「流水」から「海氷」へ調べる項目を変えた時に、難しい事典の方にだけ解説があり、「ベスト教科事典」にはなかった。このため、児童の意識に、「調べるなら、大きな事典、難しい事典」という考えがあった。そして、授業において項目はさがすことはできても調べ切れないという状態になった。

しかし、児童に取っては有益な体験となり、およそ次のことを学んだと言える。

- ① 大きい事典、難しい事典がすべてにおいて役に立つとは限らない。自分にあった資料の選択も必要であること。
 - ② ごく基本的な言葉はどの事典でも載っている。たくさん書いてあることが不便な場合もある。

(2)について

「塩がどこでとれるのか」ということが児童にとって問題のはずであった。ところが「塩」を調べた班のほかに、「山」、「さばく」を調べた班が出てきた。

「塩が」「どこで」という言葉を考えていくうちに、「塩が」の方でなく、「どこで」の方に意識がいったしまったのである。

これは授業の中で資料をさがす前に「何を調べるために資料が必要なのか」ということをはっきりとさせるべきであった。

また発問を変えるべきであった。

塩がどこでとれるかは教科書だけでは予想しにくいようです。



塩がどこでとれるかは教科書だけでは予想しにくいようです。塩について何か調べるとわかるかもしれません。

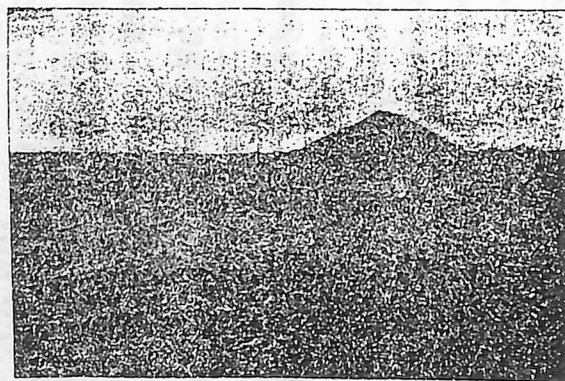
このように混乱してしまいそうであれば教師の方で調べる項目を指定してもいいのではないか。このようなことを何回か繰り返していく中で調べ方を身につけるのであるから。

今までの授業を通して、国語辞典の使用に関してはかなりの力がついているが、それ以外の資料を調べる技能に関しては「わからなければ調べる」、「調べるためには〇〇を使えばいい」という意識を持っているだけの初歩の段階である。資料検索の技能が複合されて使用される段階を目指して指導していきたい。

(二) 海から来た宝石

片^{かた}平^{ひら}
孝^{たかし}

アフリカ大陸にあるサハラさばく。
はてしなく続くすなの大地を、らくだ
の群れがもくもくと進んでいきます。
これは、さばくでとれる塩を遠くはな
れた町まで運ぶ、塩のキャラバンです。
いったい、海もないさばくに、なぜ
塩があるのでしょうか。



塩のキャラバン

このように、塩は、地球上のいろいろな場
所からとれます。海だけでなく、山からもと
れるのです。

上の写真は、どれも岩塩です。じっと見つ
めてごらん下さい。そのかがやきから、大む
かしの海の光がよみがえってくるような気が
しませんか。波音が聞こえてくるような気が
しませんか。

●しお【塩】 ①*塩化ナトリウム（食塩）
 の俗称。なみの花ともいう。②日本人は
 塩に不じょうをはらう一種の力があると
 信じ、祭りのときの祭場・祭具・神だ
 なのきよめはらいなどに、なくてはならな
 いものとした。また、家・火・炉・かま
 ど・井戸・川などをきよめ、すもうや、
 とう牛の土俵、あるいは葬式の帰りに家
 の入り口できよめるのに使われる。

→食塩

〔須藤〕

0 3 0
べ
5

ゴールド版

ベスト教科事典

図解百科 5 し

p 19

●がんえん【岩塩】 地下からほりださ
 れる*食塩の結晶のかたまり。*地質時代
 に、塩分の多い湖が干あがって塩分がの
 こり、岩石のようになったもの。①ふつ
 う、無色であるが、不純物のため、色の
 ついたものもある。②砂ばくのように乾
 そうした地域で、塩分の多い湖がかわい
 ていくと、おもに食塩が沈でんし、結晶
 が集まって層になる。③北アメリカ・ド
 イツなどに多く産する。

〔渡部〕

0 3 0
べ
2

ゴールド版

ベスト教科事典

図解百科 2 お～か

p 356

事例4 読書意欲を高めるための技能を培う授業

— 小3「読書案内」の授業で —

1 図書館の機能活用の現状

学校図書館は、2つの機能を発揮することが求められている。

それは、次の2つである。

- | | |
|----------------|----------------|
| ① 資料センターとしての機能 | ② 学習センターとしての機能 |
|----------------|----------------|

このうち、私は、学習センターとしての機能活用は、芳しくない考える。
それは、

子どもたちが、図書館の本を利用するのは読書活動の一環であり、日々の学習活動との関連性が薄い。
--

からである。

授業で学習した問題や疑問を、子どもたちは図書館の本を利用して解決しているだろうか。

ほとんどの子どもが日々の学習活動と関連していない本を利用していると考えられる。

このことは、子どもが、図書館から借りる本の多くが物語の本であることから容易に推測できる。

また、子どもは、「この本はおもしろそうだ」という理由で、本を借りるのであって、「この本は、授業で勉強したあの問題が解ける」という理由で本を借りる子は、あまりいない。

このように、子どもたちが日々の学習活動と関連した本を利用しないのは、授業で子どもたちに、図書館を利用するための技能を培っていないからだと言える。

2 図書館の機能活用を促すために

(1) 授業で培う学習技能にはどんなものがあるか

詩人・室生犀星が書いた「小景異情（二）」という詩がある。

小景異情（二）

室生犀星

ふるさとは遠きにありて思うもの
そして悲しくうたうもの
よしや
うらぶれて異土の乞食となるとても
帰るところにあるまじや
ひとり都のゆふぐれに
ふるさと思い涙ぐむ
そのころもて
遠きみやこにかえらばや
遠きみやこにかえらばや

小学校六年の富岡夏子は、この詩を分析し次のように書いた（一部を引用する）。

最後に六～十行目です。

ここは、犀星が「ひとり都のゆふぐれに ふるさと思い涙ぐむ」という心をもって都にいきたいという。このことから、すてがたく愛着のある「ふるさと」が犀星の心の中にあることが分かります。

犀星はとても暗い幼年期をおくっています。生まれてすぐ、室生真乗の内妻ハツさんにもらわれて育てられ、六歳の時、室生真乗の養子となります。そのときから、室生の姓を名のるようになったのです。このような暗い時をすごした「ふるさと」でもなつかしくなり「ふるさと」に帰ってきたのでしょうか。とても、つらかったと思います。

石川啄木も同様な詩を書いています。

石をもて追わるごとく
ふるさとを出でしかなしみ
消ゆる時なし

この詩を知っていますか。この詩も「ふるさと」に絶望して書いた詩です。

[中略・大田]

まず「石をもて……」の詩の意味を書いてみます。この詩は、まるで石をもって追

われるように故郷の渋民村を飛び出した日の悲しみは、決して消える時はないのである、という意味なのです。「まるで石をもって追われるように」という表現のしかたからして、啄木も嫌悪感のある「ふるさと」をもっています。

『子どもの評論文』大森 修 編著（明治図書）

富岡の書いた作品分析は、「小学生らしからぬ」文章である。

中学生、あるいは高校生でもちょっとやそっとでは、書けない文章である。

「小学生らしからぬ」作品分析と考えられるのは、次の三つの理由による。

第一に、富岡は、小学校で学習していない漢字を使っていることがあげられる。富岡は、小学校で学習していない漢字である「嫌悪感」の「嫌」という漢字を使っている。

第二に、富岡は、対比を使って作品分析をしていることがあげられる。室生犀星の詩を、石川啄木の詩と対比して作品を分析している。

最後に、作品以外の資料を使っていることがあげられる。「小景異情」の詩だけでなく、室生犀星の生涯が書かれている資料や他の詩人である石川啄木の作品を使って作品分析を書いている。

なぜ、富岡にこのようなことができたのだろう。

それは、授業で次のような技能を培ったからだと考えられる。

- ① 学習した以外の漢字を学ぶ技能
- ② 対比を使って考える技能
- ③ 作品以外の資料を見つけだす技能

これらの三つは、図書館の機能を使いこなす上で、必須の技能だと私は考える。

(2) これまでの授業をどのように改善すべきか。

私は、授業で次の三つの技能を培うことが大切であると考えている。

- ① いろいろな言葉を使える。
- ② 対比を使って考えられる。
- ③ 調べたい本を探せる。

それぞれについて説明する。

- ① いろいろな言葉を使える。

「いろいろな言葉」というのは、授業で学習した言葉はもちろんのこと未習の言葉もさしている。そして、「使える」というのは、その言葉の意味を理解して、使うということである。

「いろいろな言葉を使える」ためには、未習の言葉に出会ったとき、自分でその言葉の意味を理解するための技能が必要である。それは、国語辞典や漢和辞典などの辞典を使える技能である。

辞典を使えるためには、授業で子どもたちに辞典を使う技能を教えなければならない。

また、授業中に何回も何回も辞典を引かせることも必要である。

国語辞典を引くことに習熟した子どもは、意味の分からない言葉が出てくると、国語辞典を使ってその言葉の意味を調べることができる。

- ② 対比を使って考えられる。

思考するときの有力な手段の一つに「対比」がある。二つ以上のものを比べてその違いを検討する方法である。この方法は、いろいろな授業場面で使うことができる。

社会科では、二つの資料を対比することができる。

国語の物語では、登場人物同士を対比することができる。また、登場人物の事件の前と後の変化を対比することができる。

対比を使って考えられる子どもは、他の教科や他の授業場面でも対比の手法を使って思考することができる。

③ 調べたい本を探せる。

図書館は、資料センターの機能を持っている。図書館には物語の本だけでなく、図鑑や辞典、工作の本などいろいろな種類の本がある。

自分が調べたい本がどこにあるのか、子どもたちに指導する必要がある。

ただし、指導するときには、むやみに分類番号を教えるのではなく、少しずつ計画的に子どもたちに本を探させる活動を通して、本の場所を教えることが大切である。

以上のような学習技能を培うための方法の一つとして、子どもに物語の書き出しをカードに書かせ、検討する方法がある。この方法を県立教育センターの図書館活用講座で、向山洋一先生から教えていただいた。

向山洋一先生は、次のようにやったという。

◇ 準備するもの

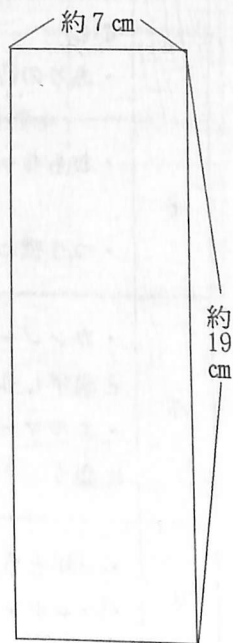
- ・ 物語の本（一人に3冊ぐらい）
- ・ カード（右図参照）（一人に3枚以上）

◇ 方 法

- ・ カードに次のことを子どもに書かせる。
 - ・ 物語の「書き出し」（一文）
 - ・ 本のラベル番号
 - ・ 物語の題・作者名 ・ 自分の名前
- ・ カードに、書かせたあと、カードを班ごとに、仲間分けし、気が付いたことを発表させる。

◇ この方法で何が培われるか。

- ・ 短時間に、多くの本の書き出しに接することができる。
- ・ 仲間分けすることにより、書き出しの工夫に気付くことができる。



3 機能活用の技能を培う年間計画

どのような教材でどのような方法でどのような技能を培えばいいか。

小学校3年生の国語を例に、その構想を示す。

月	教 材 名	授業方法	培う学習技能	留意点
4	<ul style="list-style-type: none"> ・かげを見つけたカンガルーぼうや ・みいつけた ・朝が来ると 	カンガルーの紹介 言葉遊び歌の紹介	動物図鑑の場所 言葉遊び歌、詩の場所	
5	<ul style="list-style-type: none"> ・ろく木登り ・とる ・ヤドカリノ引っこし ・ありの行列 	作文 言葉遊び歌の紹介	辞書活用 言葉遊び歌、詩の場所 図鑑、辞典の使い方 “	
6	<ul style="list-style-type: none"> ・おもちゃ作り ・つり橋わたれ 	おもちゃの紹介 作者の紹介	工作の場所 日本文学の場所	
7	<ul style="list-style-type: none"> ・カンジーはかせと漢字しりとり ・エルマー、とらに会う 	漢和辞典の紹介 書き出しを視写、検討	漢和辞典 作品の対比	軽く扱う
9	<ul style="list-style-type: none"> ・三年とうげ ・シャボン玉の色がわり 	植物図鑑	植物図鑑の使い方	

	・変わっていくことを			
10	・モチモチの木	題名と作者探し	文学作品の場所	
11	・犬がかわいかったよ ・空気でっぼう		科学読み物の場所	
12	・虫のゆりかご		図鑑の調べ方 目次、さくいん	
1	・ちいちゃんのおかげ ・詩の広場	戦争	戦争に関する書物	
2	・あなたはだれ ・宝物をさがしに		国語辞典 冒険の物語を捜す	
3	・ねずみの作った朝ごはん	同一作者の作品	文学作品	

4 授業「読書案内」

指導案を示す。

3 年 3 組 国語科 指導案

1. 単元名 読書案内

2. 単元と学習技能の育成

(1) 単元で育てたい学習技能

学校図書館には、資料センターと学習センターの2つの機能がある。

そして、「図書館の機能を使いこなす子ども」とは「授業中の疑問を、自分で図書館にいて調べる子ども」である。

「授業中の疑問を、自分で図書館にいて調べる子ども」に育てるためには、授業で次の3つを子どもに指導する必要がある。

- ① 言葉（漢字）を教える。
- ② ものの見方・考え方（例えば、対比・類比）を教える。
- ③ 必要な資料が、図書館のどの棚にあるかを教える。

これらの3つの観点で、「子どもに育っている学習技能」と「本単元で育てたい学習技能」を表にまとめると次のようになる。

	子どもの育っている技能	子どもに育てたい技能
言葉	辞書活用（使い始め1週間目） 微音読で、声を合わせて読む	辞書活用の習熟
ものの見方 考え方	2つの言葉を比べる	物語の書き出しの検討
作品以外の 資料	図書館の次の棚の位置 （図鑑、科学、工作、詩）	物語の本棚の位置

(2) 本時で育てる学習技能

① 意味が分からない言葉を国語辞典で調べるようにさせる。

国語辞典を学校で使わせるようになってから、まだ一週間である。

朝学習の時間や授業時間に、国語辞典を使って調べる子どもが増えてきている。本時では、辞書を使いなさいとは指示しないが、進んで国語辞典を使っている子どもがいたらほめ、国語辞典の活用を促したい。

② 物語の書き出しの相違について気付かせる。

物語の書き出しは作品によって異なる。書き出しを書かせることにより、いろいろな作品に出会わせ、作者の書き出しの工夫について話し合わせたい。また、数多くの書き出しに出会わせることで、読書意欲を高めたい。

3. 展 開

(1) ねらい

物語文の書き出しを視写することで、物語文の棚の位置を理解させると共に、作者の書き出しの工夫について気付かせ、読書意欲を高める。

(2) 展 開

教 師 の 働 き かけ	児童の意識思考	留 意 点
1. クイズをします。 ・「アンクルトムの小屋」は、どこにあるでしょう。 ・「ミリ子は負けない」は、どこにあるでしょう。	・あの棚かなあ。	各3人を指名、探させる。
2. 今日は、図書館でいろいろな物語文の書き出しについて調べるのでしたね。	・どんな書き出しがあるかなあ。	
3. 一人3冊ずつ物語の本をもってきてきましょう。		

<p>4. 物語の書き出しをカードに書きます。</p> <p>書き出しは、作者が一番頭を使って書くところです。書き出しにどんな工夫がしてあるか調べてみましょう。</p> <p>カードには、次のことを書きます。</p> <p>①書き出し(一文) ②物語の題 ③作者 ④自分の名前</p>	<p>・どんなことを書くのかなあ。</p>	
<p>5. 先生が止めと言うまで書きます。持って来た本を書き終わったら友達と交換してなるべくたくさん書きましょう。</p>	<p>・作業</p>	<p>机間巡視</p>
<p>6. 止めなさい。カードを書いていて気付いた事を発表してください。</p>	<p>・一文の長さが違う ・登場人物の説明</p>	
<p>7. 書き出しには、いろいろな工夫があることが分かりましたね。</p>		

◇ 本時の実際

発問 1

「アンクルトムの小屋」の本は、どこにあるでしょう。探してくれる人いますか。

クラスのほとんど全員が、手を挙げた。

5人を指名し、「アンクルトムの小屋」を探させた。「アンクルトムの小屋」は、英米文学に入っているの、その棚にあるわけである。指名された3人は、文学の棚の端から端までを駆けずり回り、探していた。

約3分後、その本を見つけた子どもが、「あった。」と大きな声を出した。

私は、子どもからその本をもらい、その本に対する簡単な説明をした。

書名から、一つの本を探すという経験をこれらの子どもは、初めてしたのではないだろうか。

発問 2

「ミリ子は、負けない」の本は、どこにあるでしょう。探してくれる人いますか。

発問1と同様、ぱっと子どもの手が挙がる。

5人を指名し、「ミリ子は、負けない」を探させた。この本は、日本文学に入る。だから、日本文学の棚を探せばいいのだが、専門家が、探せばものの30秒位で探せるだろう。

子どもは、日本文学の棚から外国文学棚の端まで、行ったり来たりしながら探している。

約3分後、その本が見つかった。本の説明を簡単にした。

指示 1

一人3冊ずつ物語の本を持ってきます。自分が読みたい本を探すのではありませんから、ぱっと選んでください。

30秒以内に、3冊取り出して座ります、はじめ。

子どもが、全員3冊選んで座ったら、子どもが文学の本を選んだかどうか次のように確認する。

（本を1冊持ち、本の背表紙のラベルを指差して）ここに、本のラベル番号が書いてあります。910とか、911のように、900台の番号であれば、その本は物語の本です。みなさんが持ってきたのは物語の本ですか。

指示 3

と言って、黒板に右のような「例」を書いた紙を張る。

そして、書き出しの一文、物語の題、作者、自分の名前を書くように言う。

先生が止めと言うまで書きます。持ってきた本を書き終わったら友達と交換してなるべくたくさん書きましょう。

机間巡視をしながら質問を受ける。

子どもたちは、真剣に書き出しをカードに書きはじめる。

「物語の題」のところで、何を書いたらいいか聞きにくる子がいた。一冊の

例]

本の中に、いくつも物語が書いてある本だった。

また、外国文学の場合は、外国人の作者だけを書けばいいと言った。

指示 5

止めなさい。カードを書いている気付いたことを発表してもらいます。
実は、物語の書き出しというのは、作者が一番頭を使って書くところなのです。物語の書き出しに作者はどんな工夫をしているのでしょうか。

なかなか意見が出なかったもので、ちょっと間をおいてから、「何か変わった書き出しは、ないかな」と聞いた。

すると、次のような書き出しが出てきた。

・ぼく ・九月 ・にゃー ・月曜日 ・ねえねえ

どれも、短い書き出しである。

子どもたちは、一つの書き出しが言われるたびに、喜んでいた。

そして、再度「書き出しで気付いたことはないかな」と聞くと次のような意見が出た。

- ・「せいで一つ。」(「 」がついている)
- ・むかし、トルコにティムール大王という王さまがいました。
(昔話は、「むかし」とか、「むかし、むかし」とかついている)
- ・おれは、ムチャクチャだ。(登場人物の紹介が書いてある)
- ・冬の夜でした。(季節や時間が書いてある)
- ・北海道の中央に、春がきても雪をかぶり、白くかがやいている高い山がありました。(場所が書いてある)

意見が出た時、「これと似たようなのは、ないですか」というふうに子どもに聞くと同じような書き出しを書いた子どもが大勢いることが分かる。特に、登場人物の紹介が多かった。

「作者は、何を最初に書くかとっても頭を使うんだけど、その工夫がちょっ

と分かったね」と言って借りてきた本を元に戻させ、終わりにした。

5 授業の分析

私は、図書館で授業をするときは、導入で簡単なクイズをする。子どもは、クイズに興味を持つ。書き出しの一文を言って、その物語の題を答えさせるクイズもやったことがある。

本時の授業後、子どもたちに授業作文を書かせた。

石井百合は、書いた。

本の「書きだし」の勉強をしました。

わたしは、「ゆうれいママにSOS」「ごちそうびっくり箱」「火よう日のごちそうはひきがえる」などの本の「書きだし」をカードに書きました。

「書きだし」をカードに書いていて、次のことが分かりました。

一 「書きだし」には、きせつが書いてあります。例えば、「冬の夜でした。」というようなきせつが書いてありました。

二 「書きだし」には、登場人物が出てくるのがあります。例えば、「ナナコが、ぜんぜん学校へいかなかったのは、パパとスキー旅行してきた、つぎの日からだった。」というのがありました。

三 時が書いてありました。例えば、「もうすぐ運動会です。」というのがありました。

「書きだし」の勉強をしておもしろかったです。これからも、いっぱい本を読んでもっと勉強したいです。

書き出しをカードに書き、話し合うことによって、子どもたちは、石井が書いたような作者の工夫を書いた。

また、一時間の中でそれぞれ五冊ぐらいの物語の書き出しを書くことは、有益だったと考えられる。

Ⅲ これからの学校図書館

1 開かれた学校図書館

生涯学習体系の整備が進むにつれて、「開かれた学校」にしようと言われている。「開かれた学校」にするために様々な学校運営上の工夫がされている。

ある学校では、「学校開放日」を設定している。「学校開放日」には何をするのか。「学校開放日」には、保護者がいつ何時学校にきて、どこの学級でも自由に参観してよいことになっている。また、ある学校では「親子読書」をしている。地域の人や保護者を招いて児童に話を聴かせたり、読み聴かせをしたりしている。

このような活動はこれからも様々な形で試みられるだろう。

学校図書館を保護者に開放することはできないだろうか。図書館を開放するといっても、保護者が自由に図書館を利用できるようにすることは児童の学習にとって障害になるだけである。しかし、工夫のしようによっては、児童の学習効果をあげることにもなるのである。

例えば、低学年である。

低学年の児童の読書は、絵本が中心である。この時期の児童は、一人で読むよりも保護者と読むことを好む。低学年の保護者にも図書を貸し出したらどうだろうか。児童が学校図書館から借りだした図書を読むのではなく、保護者が借りだせるようにしたいのである。蔵書数が少ないという問題もないわけではないが、児童の読書意欲を考慮した場合考えられてよいのではないだろうか。絵本は著しい進歩をしている。保護者が読んでも十分に楽しめるものになっている。

親子読書は「学校図書館を開放」する絶好の機会となるであろう。

2 コンピューターによる情報検索

コンピューターの学校への導入が進んでいる。大方は、コンピュータに親しませる活動を組んだり、教科の学習に活用したりしている。学校図書館にコン

ピュータを導入するのは、これらの活動とは多少性格を異にしている。児童が情報検索や図書の貸し出し・返却にコンピュータを利用するのである。

文部省の研究指定校には、図書にバーコードを添付して図書の貸し出し・返却にコンピュータを利用している学校がある。児童が借りだした図書や返却した図書をコンピュータが図書カードに自動印字する仕組みになっている。と同時に借りた児童の氏名や学年も自動的に記憶する。図書の利用状況が情報としてインプットされる。インプットされた情報を学年別図書利用状況としてアウトプットすることもできるし、いちばん多く読まれた本のベストテンなども知ることができる。

このように大変便利な方法ではあるが、ここでもやはり問題点がある。何かというと、図書にバーコードを添付すると、図書の定価の2割近く金額がかさむということである。図書購入予算が少なく図書が十分に購入できないという学校が少なくない現状では、このような方法はまだまだ先のこともかもしれないが、将来的展望としては考えておいてよいだろう。

これに対して、蔵書をソフト化して活用している学校もある。

蔵書の書名、簡単な紹介文、キーワードをソフト化するのである。例えば、「戦国時代」というキーワードを児童が入力すると、戦国時代に関する図書名が紹介文とともに一覧になって打ち出されてくる。打ち出された情報は印刷することもできる。このようなことは、コンピュータの入力設計ができる教師がいれば、簡単にできることである。入力設計ができれば、蔵書を情報として入力することはさして難しい操作ではない。ましてや情報を引き出す操作はなおさら簡単である。しかも、一度作ってしまうと、あとは、毎年購入した図書だけを入力すればよいことになる。

このような形で学校図書館にある図書の情報が活用できるようになっていれば、児童だけではなく教師も学校図書館を活用するようになるはずである。学校図書館の機能を発揮するためにも考えられてよい方法である。

3 学習材の充実による授業との連携

ここでいう「学習材」とは、学習に役立つ図書のことである。

児童数の減少にともなって、いわゆる「空き教室」のある学校が増加してい

る。この「空き教室」を利用して、「学習室」を設けている学校がいくつもある。学校図書館の機能を発揮させるために、「学習材」とそれ以外の図書を分離したのである。こうすることによって、児童の学習効果を高めるとともに学校図書館の利用時間にもゆとりをもたせることができるようになったという報告がある。

学校図書館は、児童の自主的・主体的学習を推進し、学校の教育課程の展開に寄与することを求められている。この求めを具体化した一つの方法が「学習材」を学校図書館から分離するという方法である。

学習室を創設しようとする学校図書館の図書の中で学習材として使える図書がいかに少ないかが分かるだろう。学習室の創設が学習材を充実させるきっかけになるだろう。授業で学習室を活用できるようにするには、なによりも学習材の充実が望まれる。

学校図書館を情報センターとして機能させようとする試みが、「読書室」あるいは「図書庫」としての図書館からの脱皮を促そうとしている。学校図書館が情報センターとしての機能を発揮できるようにならなければ、実は、オープンスクール構想も本物とはならないのである。学校図書館が情報センターとして機能するということは、「学校が変わる」ことにほかならない。新学習指導要領が求める社会の変化に主体的に対応する児童の育成は、学校図書館が機能を発揮しているかないかで測ることも可能であると言い過ぎであろうか。

＜執筆者＞

。Ⅰ、Ⅲ …… 大森 修（新潟県立教育センター指導主事）

。Ⅱ

・事例1 …… 松野 孝雄（吉田町立吉田北小学校教諭）

・事例2 …… 高橋 豊（三条市立四日町小学校教諭）

・事例3 …… 内藤 真一（新潟市立竹尾小学校教諭）

・事例4 …… 大田 博之（新潟市立笹口小学校教諭）